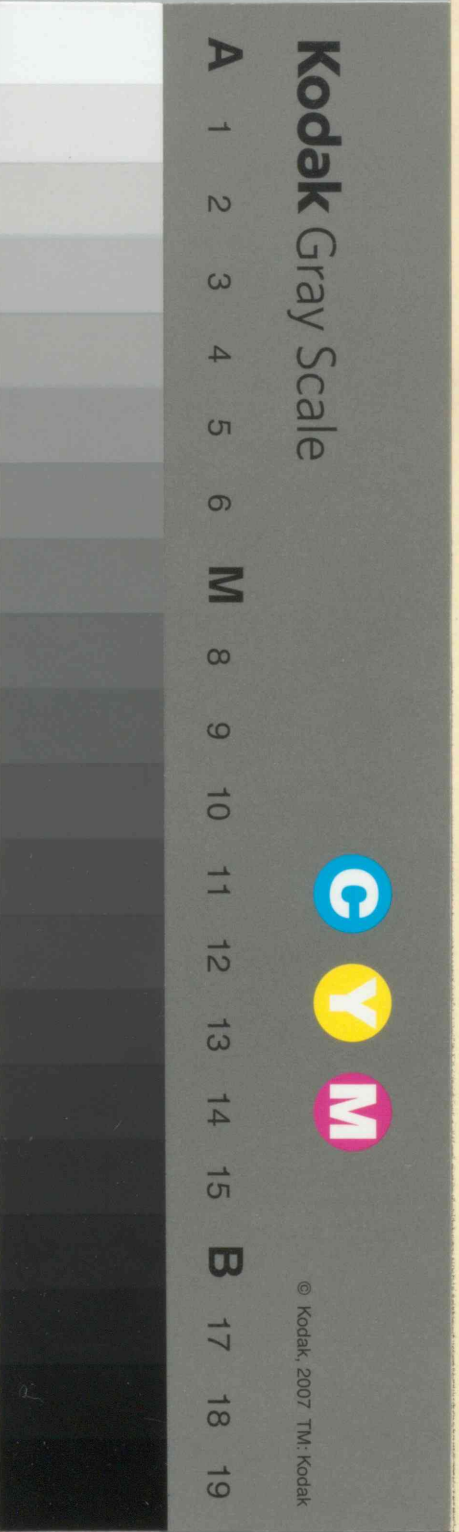
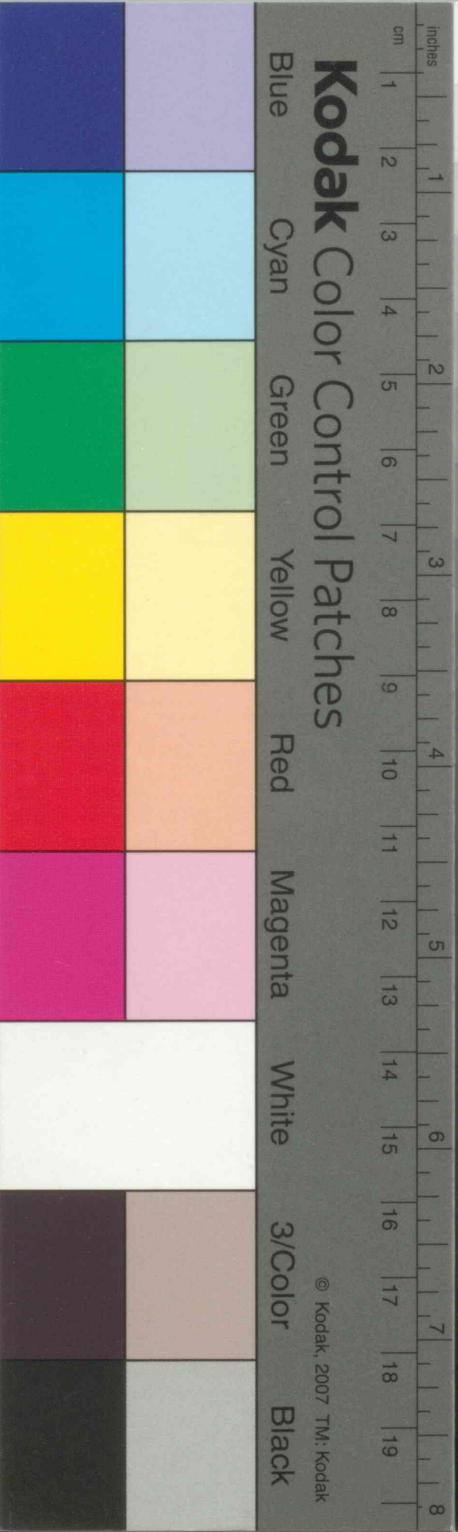


# 帝國讀本

新制第二版卷六

375.9  
Ha7  
資料室



41577

教科書文庫

4
810
41-1934
200030/554

58  
194





325.9  
H29

文學博士 芳賀 矢一 編  
文學博士 上田 萬年  
文學士 長谷川 福平 訂補

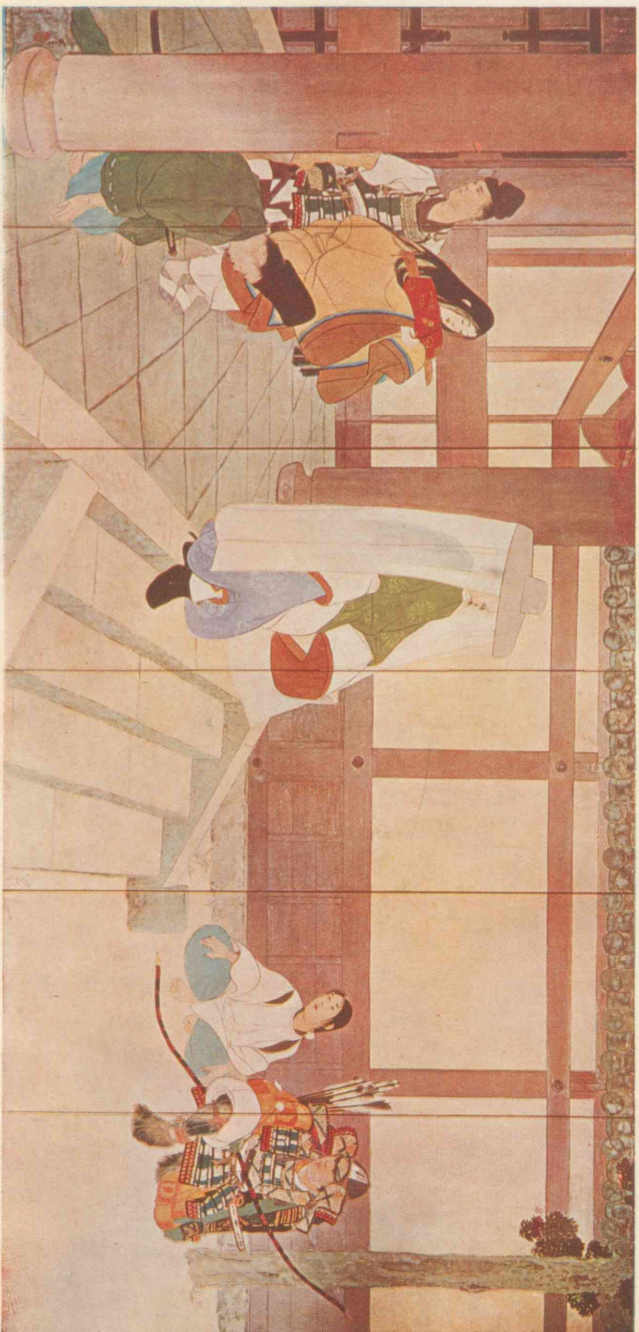
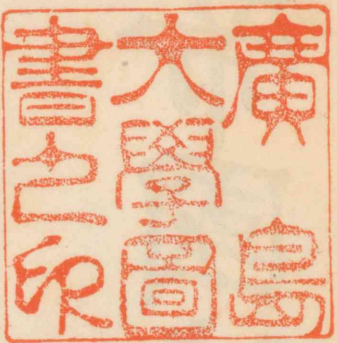
# 帝國讀本

新制第二版

文部省檢定  
昭和九年十一月二日  
中學校國語漢文科用

合資會社 富山房發兌





筆雪關本橋

皇天酬醒後



帝國讀本 新制第二版 卷六

目次

一 野邊の秋風(古歌).....	一
二 三つの眺.....	三
三 秋窓雜記.....	一〇
四 偉人.....	一五
自製の英雄たれ(自修文).....	二四
五 孝明天皇と明治天皇.....	三〇
六 菊(詩).....	三五
七 舊都の月.....	三七
八 空行く雁.....	四二
(異本會我物語).....	四二



九 武藏野……………	國木田獨歩……………
落葉する頃(自修文)……………	相馬御風……………
一〇 頼朝義經に對面の事……………	(義經記)……………
冬の山里(古歌)……………	……………
吉野の行宮……………	北畠親房……………
最後の参内……………	(太平記)……………
一四 國難と皇室……………	渡邊幾治郎……………
歴代天皇の御製(自修文)……………	佐佐木信綱……………
自ら助くる者……………	永田秀次郎……………
一六 天下第一の畫工……………	渡邊華山……………
譽……………	三浦梅園……………
一八 敕撰和歌集……………	窪田空穂……………
一九 美しい自然と我が國民性……………	……………

二〇 明淨直……………	五十嵐力……………
光明を尙ぶ精神(自修文)……………	清原貞雄……………
下駄の恩……………	大町桂月……………
春の樂しみ……………	貝原益軒……………
那須の與一の事……………	(平家物語)……………
仁は心のいのち……………	室鳩巢……………
文化の使節……………	……………
自由創造の精神……………	田澤義鋪……………







(一)鎌倉時代の人物  
藤原資房の男

在平  
名はしるは  
いそまはむ  
新島(一)  
あか思ふ人止  
ありやを

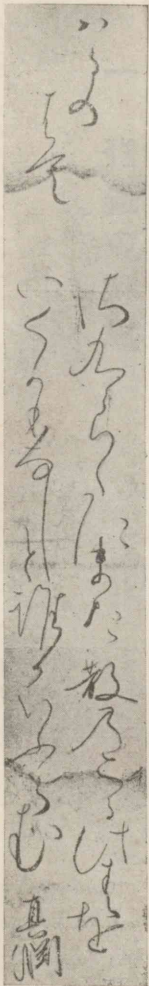
はるのほて  
さくらたに  
また散のこ  
る此春をい  
くかもしし  
と誰かとい  
らむ 眞淵

(二)長野縣筑摩郡  
歌枕として古  
來名高い

こよひぞ秋のもなかなりける  
月が海の水の上りうつさきさきしるる不この月は何月り月で  
まじうか吹はよき敷く見ると夕暁は秋の歌中とある 藤原家隆  
不らん月十五夜り月であらわ

ぬれてやひとり鹿の鳴くらん  
木の下葉が赤くさうさう散つる山の夕晴雨にぬれん  
鳴りこもるのたうらうか 藤原資宗  
いかりもていさうを奏する  
いかだしよ待てこととはん水上は

いかばかり吹く山のあらしぞ  
りかぢしよさまつり内をさうかまから待つこと小  
上流はどんをりてく大風か吹くそのが非常なる吹くせうであらうか  
賀茂眞淵



蹟筆淵眞茂賀

信濃なるすがの荒野をとぶわしの  
つばさもたわに吹くあらしかな

信濃の秋のすがの荒野の空をとぶわしのつばさもたわに吹くあらしかな

二三つの眺

煌々

群陰皆影を伏す  
有象無象



武藏野の月 (鈴木華郵筆)

皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息安靜の夜には最も  
ある。炎熱を伴はない清涼の光である。  
ふ月の光は慰安の光である。慈愛の光で  
包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしま  
悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに  
群陰皆影を伏して、大小の有象無象は  
ば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は  
は温和で、日光の様に峻烈ではない。日は  
赫々として仰いで見る事も出来ないが、  
月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れ  
ば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は  
悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに  
包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしま  
ふ月の光は慰安の光である。慈愛の光で  
ある。炎熱を伴はない清涼の光である。



かきしめて  
をせめてくわい  
をせめてくわい  
をせめてくわい

(一)賀茂真淵の門  
人荷田蒼生子  
の歌

ふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つてゐる熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國のやしの蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、限なく世界を照す月光の人の胸懷に浸みわたる事は、恰もその影の千草の露の玉毎に宿る様なものである。うちむかふ月は一つの影ながらうかぶは千々の思なりけりである。

古往今來

嗟歎  
感吟

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち満ちてゐる。天文學者は言ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

乾坤を一つにする  
(一)新續古今集  
僧仙覺の歌

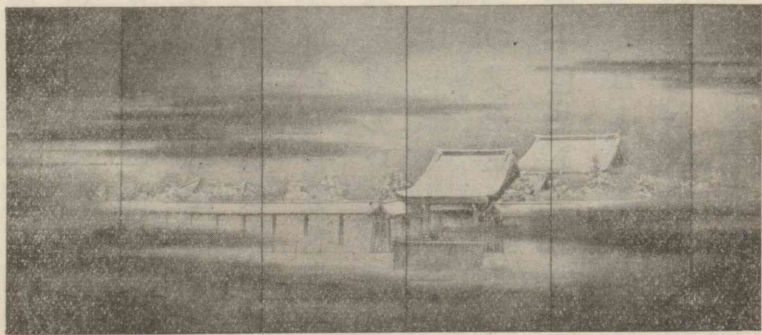
(二)唐の詩人白樂  
天の詩句

廣寒宮

月の世界

長々と川  
雪の原

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにする事は、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまじらなべて雪降るみ吉野の山といふ様に、眼に入る物、悉くその下に包まれてしまふ。三千世界銀成色、十二樓臺玉作層の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏にあるの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を残して、山と言はず、野と言はず、瞬く



(筆華玉田前) 雪の宮皇都京



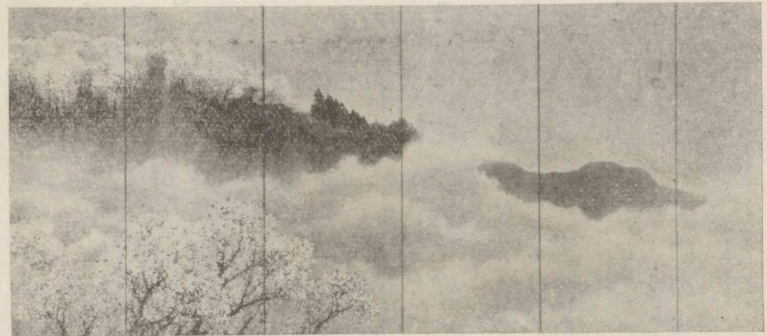
瓊玉を敷く

對照の妙  
變化の巧  
造化の巧  
天也自然  
かき作らば  
工夫しむれば  
したものは

うちに瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々な眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺める様な心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙變化の奇造化の巧を盡したものでないか。一年中蓮の花の咲いてゐる極樂淨土は、決して我等の世界程楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花の様々、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、

棺郭



菊池芳文(筆)

無限の詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花野の花、何れも月雪と同じ様に、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれ程寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺郭を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花とは縁が切れないのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て、人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の



(一) 年ふれば齡は老いぬればか  
しはあれど花を  
お見ればもなし  
(古今集、藤原良房)

(二) 新古今集、康  
資王の母の歌

(三) 古今集、清原  
深養父の歌

(四) 謡曲「葛城」の  
句

語は、皆花に基づいたものである。古今の詩歌は擧げるだけ愚かである。余は唯花をし見ればものおもひもなしといふ古歌を以てすべてを總括し得べしと信ずる。  
月雪花三つの眺には各その特長がある。何れを前何れを後と言ふ事は出来ぬ。

やま 櫻花の下風吹きにけり  
木のもとごとくの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

ふゆながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、櫓頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を賞でぬ人もない。思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉ざれてある極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を樂しましめる物もない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見る事が出来ない。我等日本人の昔も今もこの三つの眺を擅にする事を得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた我をもゆるせ。秋の夜の月月は古來の歴史を照す鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。人生の感は花

寸紅

(五) 瓦斯  
不夜城の觀

(六) 伊藤仁齋の歌

鏡のおどろ

秋の夜の月  
せ見し  
うま  
夢を起した  
ものは  
あふ  
又  
入  
入  
入



を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ、いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

三 秋窓雜記

北村透谷

(一)詩人、思想家、名は門太郎、神奈川縣の人、明治二十七年歿、透谷全集がある。

五情を沒了す

悲しきものは秋なれど、また心地よきものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の土を高うするに如かず。花の人を酔はしむると月の人を清からしむるには、おのづから味はひを異にする物あり。喜樂のうち人間に五情を沒了するは、世俗の免るゝ能はざる所ながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

二

身事匆忙  
紅塵萬丈  
駕御す

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、をる事僅かに二日。思へらく、この秋こそは此所に來りて、萬づの秋の悲しさを味ははんと。圖らざりき、身事匆忙として、空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは、されど秋は鎌倉に限るにあらず、人間到る所に詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道はこれにこそあれ。

三

我が庵もまた秋の光景には漏れざりけり。喉鳴きやぶるばかりのひよの聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きて其所か此所かとうち見れば、其所にもあらず、此所にもあらず。窓を閉ぢて書を繙けば、一層高く聞ゆなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なれど、秋の聲ぞと聞けば、その面白さ讀書の類にあらず。

四



微恙

病みて他郷にある人の身の上を氣遣ふは、人も我も變らじ。されど我は常に健全なる人の、偶病みて臥床するを祝せんとはするなり。病なき人の道に入る事の難きは、富める人の道に入り難きに等しからん。世には體健かなるが爲に心健かならざる者の多ければ、常に健かなる者の十日二十日病床に臥すは、さまで恨むべきにあらず。ましてこの秋の物色に對して、命運を學ぶこよなきたよりあるをや、かく我は眞意を以て微恙ある友に書きおくれり。

五

萩薄、我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如くこれ等の草花を珍重する事能はず。我は荒漠たる原野に、名も知らぬ花を愛づる心はあれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さ程に嬉しと思ふ情なし。さは言へど、敢へて在來の詩人を責むるにはあらず、また自己の愛する所を言はんとにもあらず。唯我が秋に

對する感の一として記すのみ。

六

鴉こそをかしきものなれ、我が山庵の窓近くおり立ちて、我をながし目に見おこしたる後、逐へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば脚を立て首を擧げて、飛去らんとする氣色は見すれど、我が害心なきを知ればにや、唯足をそろへて跳り歩くのみ。浮世は廣ければ、かゝる曲者を置きたりとして何の障にもなるまじけれど、その芥ある所に集り、穢物ある所に群がる性あるを見ては、人間の往々これに類する者多きに想ひ到りて、聊か心悪くなりたれば、物を投



(筆 濤 秋 畑 田) 鴉



局量

ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時かあくと鳴く聲は、我が局量を嘲るものの如し。げに皮肉家といふ者、文界のみにあらざりけり。

七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、こほろぎの聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲、鈴蟲のみ秋を語るにあらざ。古書、古文のみ物の理を我に教ふるにあらざ。一こほろぎの爲に我は眠の惜しまれて、物思なき心に思を宿しけり。

八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の漏れきこゆるに、そが中を窺ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶

卓然

卓然

手地の上の山や  
とまよるる  
ずめける、根

(一)教育家、東京高等師範學校名譽教授、萬貴族院議員、萬延元年攝津國(兵庫縣)に生れた。青年處世訓、青年修養訓等の著がある。

時澹

寂寞

破關

暗闇を破る  
光  
之帳を捲

琵琶を彈ずる面影、凜乎として俗世のものにあらず。その律調の端正なる事、今の世の浮華なる音楽に較ぶべからず。嬉しき事に思ひぬ。

— 透谷集 —

四 偉 人

嘉納治五郎

古來の生民、蓋し幾萬億に上るであらうか、その中から卓然として崛起し、功業德澤の炳として萬世の下に輝いてをる者は、實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歴史から除き去つたならば、吾人の過去はいかに暗澹として、いかに寂寞なものであらうか。幸ひにして幾多の偉人傑士が星の如く歴史の空に列んでゐて、今なほ吾人の心中に不老のその輝きを投じ、破關のその光を耀かしてゐる。ので、吾人人類は此所に始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。随つて吾人の文明は、彼等を離れて解釋する事

四 偉 人

五



不朽不滅

(一)左傳に見える語

皇 趨 表 傑 奇 壯 崇 壯 快 皇 猷



木戸孝允

は出来ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して、これに新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は徳を立て、その次は功を立て、その次は言を立つ」とあるが、徳にもあれ、功にもあれ、言にもあれ、彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に、壯快と言へば偉人の事業、程壯快なものはなく、崇高と言へば偉人の人格程崇高なものはない。試に思へ、我が國が明治の御代になつてから長足の進歩をなし、世界の奇蹟とまで稱せられる様になつたのも、その直接の原因は、王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は、幾多の偉人傑士の努力奮闘から生じた結果である。至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に著眼して、經國の大本を定め、謀慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を贊した

Q. Kobayashi

(一)名は孝允。門の人。明治十四年歿。明長  
(二)名は利通。兒島の人。明治十一年刺殺。明長十七年歿。  
赤心を人の腹中に置く



大久保利通

のは、かの木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴善く斷じ、時局の紛難を處理する事、快刀の亂麻を斷つが如く、凛々たる英風よく上下の信賴を得て、國家の柱石となつたのは、かの大久保甲東であつた。光明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して泰然として動かさず、曠懷偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、談笑して天下の保勢を制し、國家を磐石の安きに置いたのは、かの西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三者相俟つて、此所に天地を旋轉する様な大業が成就されたのであつて、世に彼等を尊んで維新の三傑と稱するものも、また偶然でないものである。當時彼等が協心戮力して經國の大業を建てつゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく時難を濟つたのである。海舟は人となり雋異

信濃ノなるすゞの荒野を飛ぶゆゑの

孝子ハカ

四偉人

大久保甲東 西郷南洲 木戸松菊 曠懷 磐石 落



卓拔で、その炯々たる眼識はよく時局を大觀し、機略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして、恭順の實を擧げしめ、生民をして塗炭の苦より免れしめたのである。

維新前後は我が偉大な國民精神の最も著しく發揮された時で、偉人傑士の風雲に乗じて起つた者は甚だ多かつたのであるが、中にも海舟、南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳えるが如く、嶄然として頭角を現した者であつて、若しこれ等の人がなかつたならば、維新回天の事業も、かく速かに圓滿な成功を告げる事が出来なかつたであらうと疑はれる程である。我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛んに經綸を行ふといふ國是に従ひ、世界の競争場裡に進んで大いに國勢を張る事を得たのは、實にこれ等偉人の賜である。吾人國民が景慕の情を傾けてこれが傳を立て、これが像を掲げ、彼等の墓門が既に苔むした今日、彼等が

國是

國難に殉ずる

(一)名は矩方、門の人、安政六年(一八五一年)刑死、年三十九  
(二)名は左内、前の内、安政二年(一八五五年)刑死、年二十六



吉田松陰



橋本景岳

なほ吾人の中に活き、吾人を導いてゐる様に思はれるのは、實にその雄偉な人格と、その赫々たる功業とを證するものである。

四偉人

元



身を殺して仁  
を成す  
(一) 論語、衛靈公  
篇に見える語  
(二) 長門國萩にあ  
つた松下村塾  
(三) 伊藤博文、山  
縣有朋、山田  
顯義、品川彌  
二郎、野村靖

彼は叡智靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に著眼し、一青年の身  
を以て、政界の大波瀾の中に手腕を試みたのである。不幸にして二  
十六歳を一期として刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等  
の知己によつて成就された。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非  
命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として、青  
史を照してゐる。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の存する所は水火も  
避けず、身を殺して仁を成すといふ志士の本領は、彼に於て最もよ  
く見る事が出来る。彼が(一)一小私塾の教育に盡した熱誠は、幾多の志  
士を輩出せしめて、王政維新の急先鋒となり、明治の御代になつて  
からも、五人の大臣を出した程であつた。吾人は松陰、景岳によつて、  
英偉な人物がその少壯期に於て既にかくも貴い事業をなし得た  
事を詳かにし、感歎の情に堪へないのである。

かく吾人は、明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を

先蹤を繼ぐ

傾け、感謝の意を表すると共に、これ等偉人の後を承けて、我が國の  
將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なのに想ひ到らざるを  
得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大な事を知る者  
は、またよくこれ等の偉人を學んで、その先蹤を繼ぐ事に力めねば  
ならぬ。賴山陽は十四歳の少時に、

十有三春秋 逝者已如水 天地無始終  
人生有生 死 安得類古人 千載列青史

と歌つた。古來の偉人が、少年青年の時からして漸く發達した徑路  
を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して感憤興起したのに基づ  
いてゐるのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、こ  
の情の生ぜぬ者は、その志多くは低劣で、その行もまた多くは鄙陋  
である。吾人は前代の偉人に活理想を求めて、此所に志氣を振ふ事  
が出来るのである。志氣が振つて、此所に向上發展の途に就くので



(一)孟子、盡心下  
篇に見ゆる語  
(二)支那殷末の志士、周の武王が殷を討たうとするのを謀とすなかつたのれなかつたのら  
(三)支那の賢人名は展禽、柳樹あり、多  
身に恵徳が、柳下惠と呼べ  
粟を食はず、首陽山に餓死した

ある。  
 もとより古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものである。偉人の事業には、時代の大勢が與つてその背後の力となつてゐるものもある。それで偉人を學ぶ者が、誰も皆偉人となり得るといふ事は難い。しかし、偉人を學ぶ事によつて、天才ある者は益、これを英偉に發揮する事が出來、凡庸な者は、その人として最高度の發展をなし得るのである。孟子は、(一)聖人は百世の師なり。(二)伯夷、柳下惠これなり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く、鄙夫も寛なり。百世の上に奮ひ、百世の下聞く者興起せざるなし。(三)と言つた。偉人を學ぶべき者は、獨り偉人には限らない。懦夫も、鄙夫も、皆偉人によつて鼓舞され、激勵され、感化され、指導され、以て高尚の生活に進むのである。且、古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられた者が、他日巍

(一)史記、陳涉世家に見ゆる語

巍として衆目を驚かす様な發展を爲し得た事が少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられてゐる者でも、決して失望自棄するを要しない。前に列擧した維新前後の六偉人の如きは、何れも皆微祿の士であつた。南洲、特に海舟の如きは、眞に赤貧洗ふが如き者であつた。松陰、景岳の如きは、生來虚弱多病であつた。南洲の如きは、少時極めて魯鈍と言はれた者である。松菊、甲東の如きも、少時は意氣が壯んなだけで、特に英才の煥發したわけではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建てるに及ばず、不幸にも夭折したならば、青年偉人として後世に傳へられる様な事は、何もなかつたであらう。これ等の事を思ふと、我も人なり。彼も人なり。(一)といふ思想は、決して僭越狂妄な自負として排斥し去る事は出來ない。(二)王侯將相寧んぞ種あらんや。(三)と言ひ、英俊とは凡常の士の發憤勉勵したる者のみ。(四)と言つたのも無理ではない。顔



(一)孟子、滕文公篇に見ゆる語

淵は舜何人ぞ。予何人ぞ」と言つた。有爲の士の志を立てるのは、常にかういふものである。今や我が國は世界の日本として、大活動、大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私各般の事業に於て英偉な人物を要する事は甚だ急である。今日の多數青年のうち、誰かよく前英に續ぎ來者に先だつて大業を爲すであらう。偉人を師として奮起するのは終生の最大快事であつて、たとひ運命はその人をして偉人の名を成さしめるに至らなくても、我として最高の發展を爲し得たならば、人生の目的は此所に達せられたと言ふべきではあるまいか。

— 青年修養訓 —

自修文

自製の英雄たれ

津村秀松

(二)實業家、法學博士、明治九年兵庫縣に生れた

人間は誰しも、その志す所に成功する事を希望せぬ者はない。しかし、この頃の世の中は、成功どころか、一通りの生活をする事さへなかく、容易でない。然るに今の青年の中には、その志す所

に樂々と成功する事を念とするかに見える者が少くない。

一體今の世の中で、樂々と成功しよう、無難に出世しようなどといふ考程間違つた考はない。日本の事だけで考へても、本國だけで同胞既に六千五百萬、大日本になると人口無慮九千萬以上だ。この様に數多い同胞兄弟のうちから、誰彼と人に言はれる程の人物になる事は、一通りの苦勞や努力で到底出來ようはずがない。人並の努力では、結局、人並の人間になるより外はない。常人の爲す能はざる所を爲してこそ、始めて常人以上になり得るのだ。將來世の中に頭を出さうと切々勉強してゐる學生だけでも何百萬人とある。これが皆お互にお互の競争者だ。世界全體の上では、その數は更に數十倍するであらう。これだけの大敵を前後左右に控へて、その志す方面の第一人者と成らうといふには、常人の不可能とする事を可能とするくらゐの氣魄と努力とがなくてはならぬ。學資があつて學問する、父兄があつて他郷

氣魄、氣象



敢行する  
おしきつて行  
ふ。  
教鞭を取る  
學生を教授す  
る。

に遊學する。氣候の良い所で仕事をし、便利な所で商賣をする。……こんな事は誰にでも出来る事だ。誰にでも出来る事をしただけでは、普通の結果しか得られないのは當然ではないか。普通の事以上の事を敢行してこそ、始めて人並以上の成功を期待する資格が生ずるのだ。

今から十數年も前の事、私が今の神戸商業大學に教鞭を取つてゐた時、毎年の卒業式に當つて、よく次の様な事を述べては、告別の辭に代へた。

今日は誠にめでたい卒業式であるが、諸君に對する學校の卒業式は、實は諸君に取つての社會の始業式なのだ。學校はこれまで諸君に對して、唯一通り豫備知識を與へたに過ぎぬ。書物の上の學問なり勉強なりでも、今日を以て終りを告げたのだと思つては大きな間違だ。社會へ出てからもなほ引續いて書物を讀み、勉強をせねば、せつかく學校が與へた豫備知識が何にも

ならぬ。學生時代と違つて、勤人となれば、恐らく暇がなからう。それでも朝は人並より早く起き、夜は人の寝る時間を盗んで、せめて自分が勤めてゐる所の會社なり銀行なりに關する書物や専門の雜誌だけでも、必ず目を通すといふ心懸がなくてはならぬ……

と。ところが、その頃の卒業生が今も時々遊びに来るが、雜誌の間に、卒業當時の事を思ひ出してはよくこんな事をいふ、

私どもが卒業する時に、先生の御教訓もありましたが、さて愈會社、銀行に勤めてみますと、激しい一日の働ですつかり疲れさつてしまつて、とても書物や雜誌を讀むなどといふ時間も根氣もありません。

それに對して私は常にかう答へてゐる。  
それはその通りに違ない。恐らく會社や銀行の仕事は、君等に、朝早く、夜晩く讀書し研究する餘裕と勇氣とを殘させまいだ。



から、自分の言つた事は確かに無理なのだ。人並では出来ぬ事なのだ。しかし、人並に出来る事をするだけなら、人並の出世で我慢する外はないではないか。人間の出来ぬ事をせよとは言はぬが、人間の出来る最大限度までの努力を盡さねば、人間最大の出世が出来ぬ道理ではないか。



私が曾て學窓にゐた頃、教科書としてフランクリンの「自叙傳」を読んだ。これは徹頭徹尾、偽らざる告白である。世の中に「偽らざる告白」を書き得る人が果して幾人あらうか。私は先づこの事に感服した。次には「偽ら

ざる告白」即ち眞の自叙傳を書き得る人があるにしても、これ程立派な「人間努力」の内容を整へ得る人が果して幾人あらうかといふ事に感服した。そしてこの二つの感服が、今もなほ私の心にしつかと銘せられてゐる。

Benjamin Franklin  
アメリカ合衆國の政治家・外交家（西紀一七〇六年—一七九〇年）  
徹頭徹尾 始めから終りまで一貫すること。

銘せられるべきものである。

Otto Eduard Bismarck  
ドイツの政治家・鐵血宰相の名がある（西紀一八一五年—一八九八年）

George Washington  
アメリカ合衆國獨立の元勳（西紀一七三二年—一七九九年）

Abraham Lincoln  
アメリカ合衆國第十六代の大統領（西紀一八〇九年—一八六五年）  
東京大日本雄辯會講談社雄辯の月刊昭和八年一月號附八録

小學校も卒へず、中學校にも入らず、正式の教育は何一つ受け得なかつた移民の貧兒が、開墾日なほ淺いアメリカで印刷屋の小僧になり、植字手傳の傍ら、夜を日に勉強した事が土臺になつて、一代の大政治家となつて副大統領になり、殊に一大科學者となり、一大發明家となつたフランクリンは、全く自製の英雄であり、徹頭徹尾自力獨學の大學者である。私は、ナポレオンにも、ビスマルクにも餘り感心せぬ。ワシントンなどに至つては尙更の事だ。それでゐて、古今東西の英雄豪傑のうちで、リンカーンと並べてこのフランクリンを最も強く崇拜するのは、それが時運といふ手傳や、天才といふ素質がさう多分になくとも、勉強と努力と修養次第で、必ず人間の到達し得る範圍の英雄豪傑になり得る事を、身を以て示したからである。

新興日本大熱辯集



(一) 評論家、貴族院議員、名は猪一郎、後久三年肥後國熊本縣に生れた。静思録、吉田松陰、國民小訓、近世日本國民史等の著がある。

天才夙成  
大器晩成

### 五 孝明天皇と明治天皇

孝明天皇と明治天皇とは、共に未だ丁年に達し給はずして寶祚



孝 明 天 皇

を踐み給ひしが、孝明天皇は三十六の御壯齡にして、明治天皇は六十一の御高齡にして崩御ましましき。孝明天皇は天才夙成におはし、明治天皇は大器晩成におはしき。孝明天皇は御年二十歳前後よりして、既に秀でたる政治家におはし、御年二十五歳に至りては英邁果斷、滿廷諸朝臣の驚歎する所におはしき。明治天皇は御年三十歳にして聖徳の光顯れさせ給ひ、分けて經世の御識度は、明治二十七八年役前後、御年四十歳以後に於て、更にその開

(一) 徳富蘇峯

(一) 京都市左京區下鴨にある官幣大社、賀茂御祖神社と、上京區上賀茂にある官幣大社、賀茂別雷神社。

展圓熟せるを示し給ひき。孝明天皇は御壯齡を以て崩御せられ、世にも人にも惜しまれ給ひけれども、その間に少からざる國務を施爲せしめ給ひたり。明治天皇は御父君よりは二十五年の長き間世にましまして、晩成の聖徳を遺憾なく國家民人の上に光被せしめ給ひたり。

兩天皇はかくの如く天壽を異にし、御性格を異にし給ひけれども、國君に最も重大なる點に於ては、一致させ給ひき。その第一は、天位に關する責任の御觀念なり。天津日嗣は皇祖皇宗の傳へ給ふ所にして、天壤と與に窮りなかるべきもの、決して御自身の私有にあらずとの御觀念これなり。この大旨は、孝明天皇の宸翰にこれを拜する事を得べし。天皇嘗て賀茂神社に詣で給ひて、

孝  
くらゐ山神のこゝろやいかならん  
おろかなる身はをるもくるしき



祥雲瑞氣  
靈蹕

(一)第六十代醍醐天皇

と詠ませ給ひしこそ畏かりしか。これ乾々惕若の御心を神前に獻げ給ひたるものにあらずして何ぞや。更に明治天皇の

国民の業にいそむ世の中を

みるにまされる樂しみはなし

の御製を拜誦すれば前なるには、國歩艱難なりし御代の韻を帯び、後なるには、祥雲瑞氣の御代の調の靈蹕たるを拜すべし。而して人君の重大なる御天職に就いての御責任感の含蓄に至りては、全く一致し給へるなり。

その第二を、民の父母にています御觀念なりとす。孝明天皇の御製に、

烏羽玉の夜すがら冬の寒きにも

とあり。これ延喜の帝の寒夜に御衣を脱し給ひし畏き御心にも同

畝

1

じからずや。明治天皇の御製にも、

賤が住む藁屋のさまを見てぞ思ふ

あめかぜあらしき時はいかにと

とあり。蒼生を子視し給ふ優渥なる大御心の符合させ給ふは、決して偶然にあらず。庶民を以て大御寶とし給ふ我が皇祖皇宗の御遺訓を堅く守り給へばなり。

その第三は、國民に對し給ひし一視同仁の叡慮なり。實に擧國一致は、兩天皇の天下を経綸し給ひし大綱なりき。孝明天皇の御製に、

天が下人といふ人心あはせ

よろづのことに思ふどちなれ

とありて、明治天皇も

千よるづの民の力をあつめなば

いかなる業もならんとぞ思ふ

五 孝明天皇と明治天皇

木橋年見山下政



と詠ませ給ひき。舉國一致の力を以て海外に雄飛するは、維新中興の大眼目なりき。孝明天皇はこれを前に唱へ給ひ、明治天皇はこれを後に行ひ給ひき。この大綱は我が日本帝國の存在せん限りは、未

來永劫かはる事あるべからず。

異國もなづめる人も残りなく

とは孝明天皇の御製にして、時勢に鑑て同仇敵愾の精神を鼓舞し給ひたるものにあらずや。

國の爲あたなす、仇はくたくとも

いつくしむべき事な忘れそ

とは明治天皇の御製にして、維新後の國際關係を省て、敵愾の精神を超越し給ひたるなり。國權を侵蝕し來る外敵を退治するは、嘉永慶應に於ける對外の急務にして、敵人をも愛するは、明治に於ける

對外の精神なり。

吾人の常に唱道する精神的帝國主義は、實に明治天皇の實行し給ひし所なれども、明治の御代は孝明天皇の遺し給ひし所を承けて、國權の恢復に急なる時代にして、これが實現は大正の御代に期すべかりしが、しかも大正の御代は餘りにも短かりき。さればこれが完全なる實現は、これを今上陛下の御代に期せざるべからず。

### 六 菊

麗かな菊の園を私は歩きまはる。

高貴な花の間を、

優雅な香の中を、

王子のやうに爽かに歩きながら、

私は日本の花の王の讚へる。

中西悟堂

(一) 詩人。明治二十八年、金澤市に生れた。東京市、花巡禮、武蔵野等の著がある。



うたげ

何といふ清淨な誇らかさ、  
何といふ美しいしとやかさであら  
う。

純白な花、黄いろい花、

伸びた花びら、卷かれた花びら、

花は花に隠れ、花は花から秀でて、

鮮かに優しく、

寶石のやうに日の光に浮ぶ、

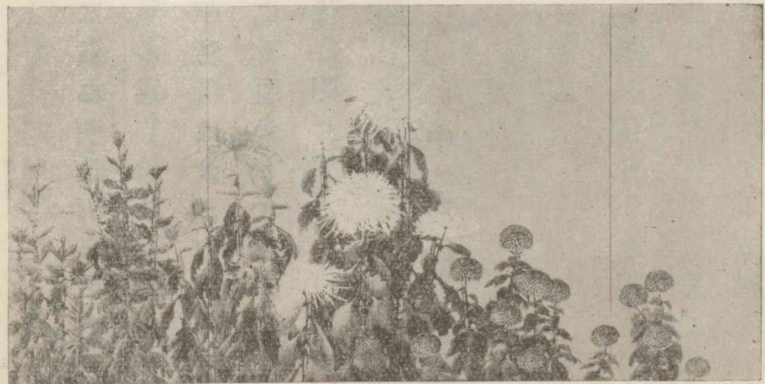
清潔な祭のやうな、神聖な彫刻のや

うな、

尊い、畏い日本の花よ、

あゝ、鶴のやうな心になつて、

この日本の花の王のうたげの中を、



(筆舟御水速) 菊

(一) 歌人、建久二  
年(一八五一  
三)歿、年五十一  
三。京都のこと。  
當時都は遷さ  
つた。福原にあ  
(二) 平清盛。  
(三) 兵庫縣(攝津  
國)にあつた  
名所。武庫郡  
魚崎から深江  
邊の濱を言つ  
たらしい。  
(四) 今の御影附  
に、武庫郡布引山  
にある。當時  
紀州那智瀑を  
第一とし、こ  
の瀑を第二と  
した。  
(五) 一はる、夜の  
星か河邊の螢  
か、あまの住む  
方か、あまのた  
く火か(新古今  
集)  
(六) 兵庫縣(攝津  
國)川邊郡猪  
名川の河口、舊  
(七) 同郡稻野の舊

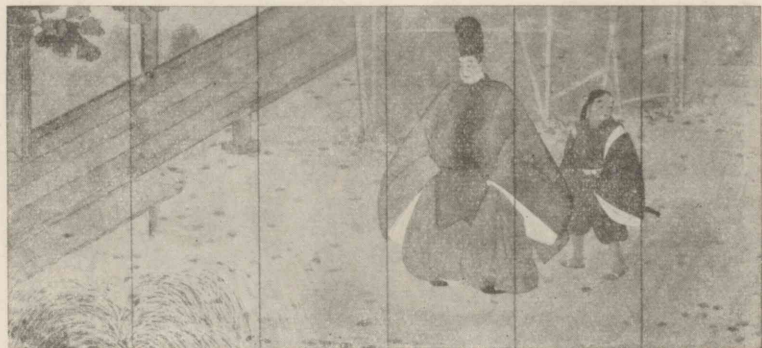
秋の日のうたげの中を、  
爽かに私は歩きまはる。

### 七 舊都の月

後徳大寺の左大將實定は、舊都の月をこひわびて、入道に暇を乞  
ひ、都へ上り給ひけり。もとより心好き給へる人にて、憂世の旅の思  
出に、名所々々を訪ひ見て、ぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀の松  
原みかげの松、雲居に曝す布引は、我が朝第二の瀑とかや。業平の中  
將の、かの瀑見ての歸るさに、星か河邊の螢かと、浦路遙かに眺めけ  
ん、何所なるらんおぼつかかな。あな、湊の曙に、霧たちこむる昆陽の  
松、必ず春にはあらねども、山本霞む水無瀬、川男山に澄む月は、石清  
水にや宿るらん。秋の山の紅葉の色、稻葉を渡る風の音、御身に浸み  
てぞ思しける。



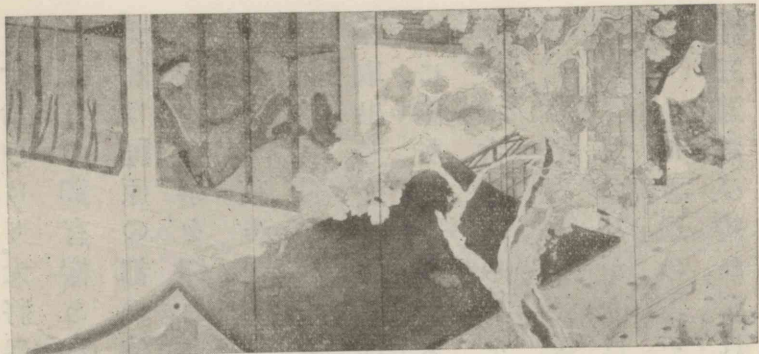
(一)見わたせば山も霞む水無瀬川ゆふは秋となふ思ひけん(新古今集)後鳥羽天皇  
(二)大阪府攝津國三島郡島本村山崎驛の南を流れる小川  
(三)京都府山城國綴喜郡山崎驛と淀川を挟んで相對する山中に石清水といふ泉山上に石清水八幡宮がある蓬がそま(杣)鳥の臥所  
(四)皇太后藤原多子(近衛天皇の皇后)の御所



舊都の月(乾南陽筆)

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、偶、殘る門の内、行交ふ人もなければ、淺茅が原、蓬がそまと荒果てて、鳥の臥所となりけり。八月半ばの事なれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住み、をり知り顔に鳴く雁の音さへつらくぞ聞し召す。大將はいと哀れに堪へずして、大宮の御所に参り、かねて心知れるなにかしの侍従して、かくと申させ給ひければ、宮斜ならず御悦ありて、此方へと仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明

居待の月



舊都の月(乾南陽筆)

し暮し給ひしに、今は幽かなる御所の御有様、軒につた茂り、庭に干草生ひかはす。言問ふ人もなき宿に、萩吹く風も騒がしく、昔をこふる涙とや、露ぞ袂をぬらしける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえだえに、草のとざしも枯れにけり。大將哀れに心の澄みければ、庭上に立ちながら古き詩を詠じ、それより御前に参り給ひけり。八月十八日の事なり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば卷上げて、御琵琶をあそびしてわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、なほや遅しと思しけん、御琵琶をさしおかせ給ひつゝ、御心を澄ま



ばち(撥)  
あたりを拂ふ

させ給ひけり。大將參り給ひければ、大宮はばちにて、それへ」と仰せ  
けり。その御有様、あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。  
大將は福原の都の住憂き事語り申して泣かれければ、宮は平の京  
の荒行く事を仰せ出して、共に御涙に咽ばせ給ひけり。  
かくて夜もいたく更けければ、後の宮は御琵琶をかき寄せさせ  
給ひて、秋風樂を弾かせ給ふ。侍従は琴を弾きけり。大將は腰より笛  
を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒行く悲しさを、今  
様に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、

淺茅が原とぞ成りにける。

月のひかりはくまなくて、

あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始め參らせて、御所中に候ひ給ひける

女房たちをりから哀れに覺えて、皆袂をぞ絞りける。

—源平盛衰記—

### 八 空行く雁

頃(一)は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立返り

て一萬は九つ箱王は七つにぞなりにける。ある夕暮箱王は母の膝

の上に戯れながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや、誠

やらん父の御事は佛になつてましますとや、その佛はいづくにま

しますぞや、行きて拜み奉らばや、母御前、いざさせ給へ」と言ひけれ

ば、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりなり。

母泣くく、宣ひけるは、あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強

く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、父御前は、誠やらん狩場より歸り給ふ途

環

(一)一八四一年

(二)兄曾我十郎祐

成の幼名

(三)弟曾我五郎時

致の幼名

いざさせ給へ

(四)大祐泰の死後  
曾我祐信に再  
嫁した。  
(五)祐信



尾籠を掃く

(一) 祐經

(二) 源賴朝

(三) 相模國(神奈川縣)足柄下郡曾我中村

かりがね

人倫

四三郎祐泰

にて工藤一藤とやらんに射られて死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿の切替にて鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らずや。過ぐらんなど大人しく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びたるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ箱王殿空を飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、一つは子供にてぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わ殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持

小賢しく

ちて、今ぞ思ふ様に物を射ありきなん。我等より幼き者にて、馬鞍弓矢をもて物を射おくりく事の羨ましさよ。これ等の事ども思ひ續くれば、いつもよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや。とて、袖に顔を差入れてさめくと泣きければ、弟も小賢しく顔を合せて泣きあたり。二萬の乳母の女房これを聞き、あなあさまし。人もこそ聞け。いかにわ上臈たち夜も更けぬるに、さ様にはおはするぞ疾くく入らせ給へ。と恐しげに言ひければ、二人の者は門外へ逃出でて、思ふ様に飽くまで泣きて後に、内に入りけり。



(筆山周田飛) 弟兄我曾

八 空行く雁

修道

四



年ばへ

(一)小説家。名は哲夫。千治。年四十一。武蔵野。運命論者。著者。歩らる。集る。て。め。る。

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて、互に袖をぞぬらしける。ある時兄弟は、竹の小弓に薄はぎの小矢を取添へて遠待に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓、矢は男の一の能にてあるなるぞ」と言ひければ、弟もうちうなづきけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。

—異本會我物語—

### 九 武藏野

(一) 國木田獨歩

昔の武藏野は萱原のはてもない光景で絶類の美を鳴してゐた



國木田獨歩

様に言傳へられてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色と言つてもよい。その木は主にならの類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌出る。その變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に、月に風に、霧に時雨に雪に、綠蔭に紅葉に、様々の光景を呈する。その妙は、ちよつと西國や東北地方の者には分りかねる。元來日本人は、これまでならの類の落葉林の美を餘り知らなかつた。林と言へば、主に松林のみが日本の文學、美術の上に認められてゐて、歌にも、なら林の奥で時雨を聞くといふ様な事は頗る稀である。自分はツルゲーネフの書いた物で、二葉亭が譯したある短篇の冒頭にある左の一節を愛讀する。

秋九月中旬といふ頃、一日自分がさるかばの林の中に坐してゐ

(二) 小説家。名は哲夫。千治。年四十一。武蔵野。運命論者。著者。歩らる。集る。て。め。る。



た事があつた。朝から小雨が降注ぎ、その晴間にはをり／＼なま  
暖かい日影も射して、誠に氣まぐれな空合。あは／＼しい白雲が  
空一面にたなびくかと思ふと、ふとまたあちこち瞬く間雲切が  
して、無理に押分けた様な雲間から、澄んで賢しげに見える人の  
眼の如く、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧し  
て、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戦いだしたが、その  
音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する面白さ  
うな笑ふ様なさ／＼めきでもなく、夏の緩やかな戦ぎでもなく、長  
たらしい話聲でもなく、また秋の末のおど／＼した薄寒さうな  
お饒舌でもなかつたが、唯漸く聴取れるか聴取れぬ程のしめや  
かな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶ様に梢を傳はつた。照  
ると曇るとで、雨にじめつく林の中の様子が、間斷なく移り變つ  
た。或は其所にありとある物すべてが一時に微笑した様に、限な

(二)わらびの類  
もつれ(縫)

物のあいろ

く赤み渡つて、さのみ繁くもないかばの細々とした幹は、思ひが  
けずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散布いた細かな落葉  
は俄に目に映じて、眩きまでに金色を放ち、頭を搔きむしつた様  
な(一)バアポロトニクの見事な莖、しかも熟れ過ぎたぶだうめく色  
を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透かし  
て見られた。

或はまた、四邊一面俄に薄暗くなりだして、瞬く間に物のあい  
ろも見えなくなり、かばの木立も、降積つたまゝ、でまだ日の目に  
逢はぬ雪の様に、白く朧に霞む。――と、小雨が忍びやかに怪しげ  
に私語する様に、ばら／＼と降つて通つた。かばの木の葉は、著し  
く光澤がさめても、流石になほ青かつたが、唯そちこちに立つ稚  
木のみは、今はすべて赤くも黄色くも色づいて、をり／＼日の光  
が、今雨にぬれたばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱



けて來るのを浴びては、きら／＼と煌いた。  
 自分が落葉林の趣を解するに至つたのには、この微妙な紋景の筆の力が多い。これはロシヤの景で、しかも林はかばの木で、武藏野の林はならの木だから、植物帯から言ふと甚だ異なつてゐる。が、落葉林の野である事は同じである。自分は屢思つた、若し武藏野の林がならの類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な變化に乏しい色彩の一樣なものとなつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。ならの類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がさゝやく。木枯が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞つて、小鳥の群の様に遠く飛去る。木の葉が落盡せば、數十里の方域に亙る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は日記に、林の奥に坐して四顧し、傾

諦視する

聽し、諦視し、默想す。と書いた。ツルゲーネフも、坐して、四顧して、そして耳を傾けた。と書いてゐるが、この耳を傾けて聽くといふ事が、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心になつてゐるだらう。秋ならば林のうちから起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戦ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林をめぐり、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散す音。これは騎兵演習の斥候か、さもなくば夫婦連で遠乗に出掛けた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それもいつしか遠ざかつて行く。獨り寂しさうに路を急ぐ



武 藏 野



大様な趣

女の足音、遠く響く砲聲、隣の林でだしぬけに起る銃音。  
時雨の音に至つては、これ程幽寂なものはない。昔から和歌の題にまでなつてゐる。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、また林を越えて、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、いかにも靜かで、また大様な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は曾て、北海道の深林で時雨に遭つた事がある。これはまた人跡絶無の大森林であるから、その趣は更に深かつたが、そのかはり武藏野の時雨の、人懐かしくさゝやく様な趣はなかつた。

秋の中頃から冬の初め、試に中野(一)あたり、或は澁谷(二)、世田ヶ谷(三)または小金井(四)の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の足を息めてみよ。これ等の物音の忽ち起り忽ち止み、次第に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉が風なしに落ちて微かな音を立て、やがてそれも止んだ

(一) 東京市中野區。  
(二) 東京市澁谷區。  
(三) 東京市世田ヶ谷區。  
(四) 東京府北多摩郡、櫻の名所。

星斗闌干

時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るのを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干とさえた時、星をも吹落しさうな木枯が凄じく林を渡る音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思を遠くにさそふ。自分はこのもの、凄い風の音の、忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ續けた事もある。(一)熊谷直好の歌に、

夜もすがら木の葉片よる音きけば

しのびに風のかよふなりけり

といふのがある。自分は山家の生活を知つてゐながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。林に坐つてゐて、日の光の最も美しさを感じるのは、春の末から夏の初めで、その次は黄葉の季節である。半ば黄色く、半ば緑な林の中を歩いてゐると、澄渡つた大空が梢々の隙間からのぞかれて、日

(一) 幕末の國學者、周防國岩國の人。文久二年(一八五二年)歿、年八十一。



の光は風に動く葉末々に碎け、その美しさは言盡されぬ。日光とか碓氷とかいふ天下の名所はともかく、武藏野の様な廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つのも、特異の美観ではあるまいか。

目修文

落葉する頃

相馬御風



一時雨來る毎に庭の木の葉が散つて行く。私は今日この頃、この庭の木の葉の散つて行く風情を、心ゆくばかり眺め楽しんでゐる。春の芽吹き、初夏の若葉、眞夏の緑、秋のみぢ、何れにもそれ／＼の風情はあるが、晩秋初冬の落葉の風情もまた格別である。常磐木にもそれとしての獨得の風情はあるが、私はそれよりも落葉樹の風情の方に、一層複雑な味はひがある様に思ふ。常磐木ばかりの

(一)評論家、名は昌治、明治十年生れた。新潟縣に坊物語、良寛と芭蕉の著がある等郷土に語る等風情あぢはひ、おもむき

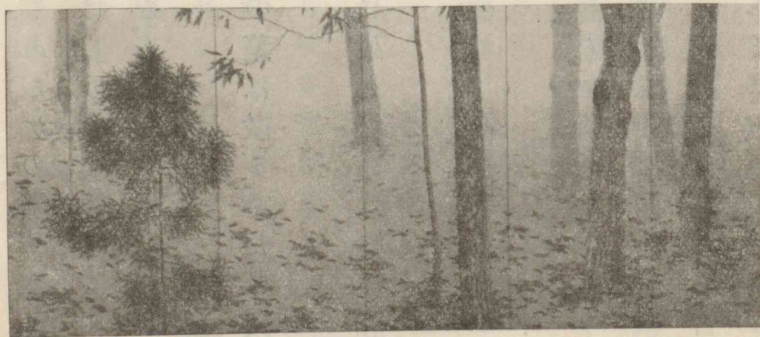
庭などは、私は想像だにしたくない。

木の葉が散る。頻りに散る。

同じく皆散つて行くのであるが、風にあふられてあわたゞしく散つて行く葉もある。風もないのに靜かに散落ちる葉もある。ひどい風が何度吹いて來ても、強情にしがみついて、なかく散らうとしない葉もある。

裏を見せ表を見せて散るもみぢ

これは良寛和尚が最期の病床に横たはりながら、幾度となく口ずさんだ句であるといふ。誰の作であるか、その事は良寛自ら語らなかつたといふが、これは自分の作でないが……と前置してから、い



(筆草春田菱) 葉 落



(一) 暮末の尼僧、  
歌人。越後長  
岡藩士奥村五  
兵衛の女。村  
治五年寂。明  
七十五年。

かにもその句が自分の辭世の言葉でもあるかの様に、幾度も幾度も微かに口ずさんだらしい。その事は良寛和尚の最愛の弟子であつた貞心尼の記録に書かれてゐる。

木の葉は散る。

裏をも表をも安らかに見せながら木の葉は散る、冷たい大地の上へ……。

この句を特に口ずさみながら安らかに死を迎へた良寛和尚の心境は尊い。

○

一荒れ毎に雪が里に近づいて来る。

二三日前までは中腹あたりまでしか白くなつてゐなかつた山々が、今日見ると、もう麓近くまで白くなつてゐる。

里に雪の來るのも遠くないであらう。この二三日の雨の音を聞いただけでもそれが感じられる。まだみぞれといふ程でもな

みぞれ(雲)  
雪が降る際、  
溫暖な氣層を  
通過して、  
通過した  
の一部分が溶け  
て急激に降る  
もの。

く、霰まじりといふ程でもないが、何となく雨の音が堅くなつた。

窓に吹附ける嵐の音のもの凄さ。

毎年愈、冬が來たと感じさせる寺々の報恩講の鐘の音を聞くのも、あともう三日だ。どの家でも眞劍に冬籠のしたくを急いでゐる。

北國の冬は永い。殆ど四箇月の間雪に埋れて暮さなくてはならぬ。

またその永い冬がやつて來つゝある。

嵐の前の静けさ。天も地も、草も木も、あらゆる物が息を潜めて、不安のどん底に放心してゐる様なその静けさ。さうした自然の静けさにたび／＼接するものこの頃であるが、それと共に、嵐の後の静けさ、その何とも言へない快い天地の静けさを時々味はふ事の出來るのもこの頃である。

北國の冬の荒れはもの凄い。しかし、そのもの凄い暴風雪があ

報恩講  
眞宗の信者が  
宗祖親鸞の師  
恩に報ずる爲  
毎年陰曆十一  
月二十三日か  
二十八日ま  
で行ふ佛事。

放心  
心をとめない  
こと。ぼんや  
りしてゐること。



ればこそ、そのあとの快い静けさを味はふ事も出来るのだ。  
永いわびしい冬があればこそ、春の歡もより鮮かに感ずる事が出来るのだ。

木の葉が頻りに散る。

しかし、葉の散つた後を見ると、何れの木も、來年の春になつて芽吹くべきその芽が、堅い皮の下に用意されてゐる。

葉の落ちた後の木々の枝に、點々として小さないぼの様に見えてゐる翌年の芽の用意を見ると、私は妙に懐かしさを覚える。

夕焼空に描き出された冬枯の木のシルウエットを見上げる感じも私は好きだ。

自然の美そのものに就いて語る事は別としても、靜かに自然の風物に眺め入る事の出来る様な心持である時の私自らを、私

Silhouette.  
黒色の畫像。  
我が國の影畫。  
十八世紀の後  
半フランスで  
一時流行した。  
風物  
ながめとなる

(一)相馬御風がその郷里糸魚川で筆集昭和六  
年東京春秋社發行

(二)源義經  
(三)源賴朝

はいとほしく思ふ。

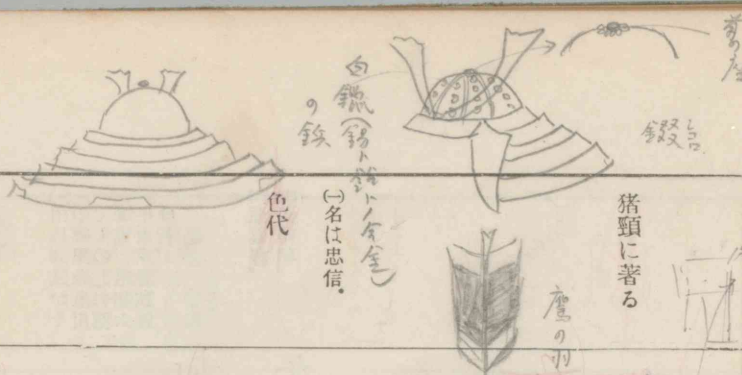
今日この頃庭の木の葉の散行く風情を眺め楽しんでゐる自分を顧て、私は何とも言へない有難さを覚える。——郷土に語る——

一〇 賴朝義經に對面の事

九郎御槽司浮島ヶ原に著き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町許引退いて陣を取り、暫く息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、此所に泊旗泊じるしにて、清げなる武者五六十騎許見えたるは、誰なるらんおぼつかなし。假名、實名を尋ねて参れ。とて、堀、彌太郎を御使にて遣さる。家子、郎等數多引具して参る。間を隔てて、彌太郎一騎進み出で申しけるは、此所に白じるしにておはしまし候は、誰人にてわたらせ候ぞ。假名、實名を確かに承り候へと、鎌倉殿の仰にて候と申しければ、そのうちに二十四五許なる男の、色白く尋常なるが、赤地の

は、いとほしく思ふ。今日この頃庭の木の葉の散行く風情を眺め楽しんでゐる自分を顧て、私は何とも言へない有難さを覚える。——郷土に語る——





錦の直垂に紫裾濃の鎧の裾物打ちたるを著、白星の五枚兜にく  
 は形打ちて猪頸に著、大中黒の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黒き馬の太  
 く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿も知る  
 しめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州へ下向仕り候  
 うてゐ候ひつるが、御旗揚の由承り、夜を日に繼ぎて馳参じて候。見  
 参に入れてたび候へ」と仰せられければ、堀彌太郎さては御兄弟に  
 てましましけり」と、馬より飛んでおり、御曹司の乳母子佐藤三郎を  
 呼出して、色代あり、彌太郎一町許馬を引かせけり。かくて佐殿の御  
 前に参り、この由を申し上げければ、佐殿は善悪に騒がぬ人にてお  
 はしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さらばこれへおはしまし候  
 へ。見参せん」と宣へば、彌太郎やがて参り、御曹司にこの由を申す。御  
 曹司大きに悦び、急ぎ参り給ふ。佐殿つくづくとこれを御覽じて、先  
 づ涙に咽び給へば、御曹司もともに聲を吞みて泣き給ふ。

(一)父左馬頭源義朝

(二)平清盛の繼母

(三)駐ヶ島

(四)源義家

互に心ゆく程泣きて後、佐殿涙を抑へて、さても頭の殿に後れ奉  
 りて、その後御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばか  
 りなり。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東、北  
 條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由  
 は微かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありとは  
 御忘れ候はで、取敢へず御上り候事申し盡し難く、悦び入り候。これ  
 御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企て候へ。八箇國の人々を始め  
 として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合する人もなし。  
 平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身進み候へ  
 ば、東國おぼつかなし。代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし。他  
 人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと  
 存ずる間、それもかなひ難かりしに、今御邊を待ちつけて候へば、  
 故左馬頭殿の蘇らせ給ひたる様にこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡



(一)源義光

水魚、うまゝり、  
魚と水との如

とかくの返事  
もなく

(二)今京都市東山  
區  
(三)愛宕郡、京都  
市の北方、丹  
波の國境

殿の後三年の合戦に、都におはする御弟刑部丞は内裏に候ひけるが、俄に内裏をまぎれ出で、二百餘騎にて下り、八幡殿と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝が御邊を待ち得参らせたる心も、いかでかこれにまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を息めん」と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞ絞られる。これを見て大名、小名互の心のうち推量られて、皆袖をぞぬらされける。

暫くありて御曹司申されけるは、仰の如く、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん、配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六まで形の如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由承り候間、奥州へ下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取敢へず馳参る。今は君

を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候心地してこそ候へ。身をば君に参らす上は、いかゞ仰に従ひ参らせでは候べき」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀れなれ。さてこそこの御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

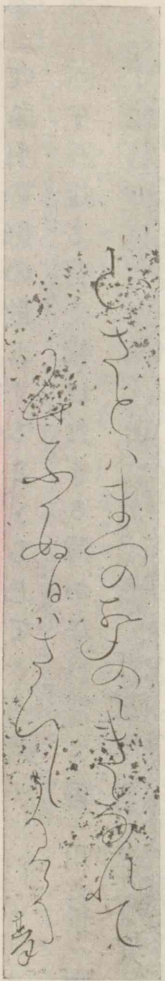
—義經記—

一一 冬の山里

冬ふゆの山里やまのに煙けむりをだにも絶とぎたじとて

柴しばをりくぶる冬のやま里

和泉式部



蹟筆月蓮垣田太

冬ふゆの畑はたけの大根だいこんの莖かぶにしもさえて

あさとでさむし岡おかざきの里

太田垣蓮月

(一)平安時代の歌  
人、越前守大  
江雅致の女  
山さとはま  
つの聲のみ  
きせなれて  
かせふかぬ  
日はさひし  
かりけり  
蓮月

(二)京都市左京區  
岡崎  
(三)幕末の尼僧、  
歌人、俗名誠、  
京都に住んだ、  
明治八年寂、  
年八十五



21 勝月  
 20 神無月  
 19 神無月  
 18 神無月  
 17 神無月  
 16 神無月  
 15 神無月  
 14 神無月  
 13 神無月  
 12 神無月  
 11 神無月  
 10 神無月  
 9 神無月  
 8 神無月  
 7 神無月  
 6 神無月  
 5 神無月  
 4 神無月  
 3 神無月  
 2 神無月  
 1 神無月

吉野朝の忠臣  
 正平九年(二)  
 正平九年(一)  
 正平九年(三)  
 正平九年(四)  
 正平九年(五)  
 正平九年(六)  
 正平九年(七)  
 正平九年(八)  
 正平九年(九)  
 正平九年(十)  
 正平九年(十一)  
 正平九年(十二)  
 正平九年(十三)  
 正平九年(十四)  
 正平九年(十五)  
 正平九年(十六)  
 正平九年(十七)  
 正平九年(十八)  
 正平九年(十九)  
 正平九年(二十)

帝國讀本新制第二版 卷六

神無月ふりみふらずみ定めなき

しぐれぞ冬のはじめなりける

よみ人知らず

てる月の影の散りくるこちして  
 よる行く袖にたまる雪かな

香川景樹

月影  
 山に月影の影を  
 影を山に月影の影を

香川景樹筆蹟

こまとめて袖うちらはらふ蔭もなし

佐野のわたりの雪のゆふぐれ

藤原定家

きのふといひけふと暮して飛鳥川

ながれて早き月日なりけり

春道列樹

一二 吉野の行宮

北畠親房

(一) 延元元年(一)五月  
 (二) 足利尊氏 正平十三年 五月  
 (三) 第九十六代後醍醐天皇  
 (四) 恒良親王 後醍醐天皇の第六皇子 延元三年 薨 年十五  
 (五) 藤原實世 正平十三年 薨 年五十一  
 (六) 新田義貞 延元三年 戦死 年三十八

奇特の事

(一) 五月にもなりぬ高氏等西國の兇徒を相語らひて重ねて攻上りぬ官軍利なくして都に歸り参る程に同二十七日また山門に臨幸し給ひけり八月に至るまでたびく合戦ありしかど官軍進まさりき

十月十日の頃にや主上山門より還幸いとあさましかりし事どもなれどなほ行末を思し召す途ありしにこそ東宮は北國へ行啓あり左衛門督實世卿以下の人々左中將義貞朝臣を始めてさるべきつはものも數多仕うまつりけり

同十二月に忍びて都を出でましまして河内國に正成といひしが一族を召具して吉野に入らせ給ひぬ行宮を造りて渡らせ給ふもとの如く在位の儀にてぞましましたける内侍所も遷らせ給ひ神璽も御身に隨へ給ひけり誠に奇特の事にこそありしか吉野の行幸に先立ちて義兵を起すやからもありき臨幸の後には國々にも

一二 吉野の行宮



(一)源顯家、北畠親房の子、延元三年戦死、年二十一。  
(二)義良親王、後の第九十七代、後村上天皇。

(三)今大阪府泉北郡、堺市の南。  
(四)「もろともに昔の下には朽ちずしてうつもれぬ名を見ざる悲しき」(金葉集、和泉式部)

(五)源顯信、正平年中戦死。

言ふばかりな

御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。またの年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し重ねてうち上りぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん著きにける。それより所々の合戦數多たび互に勝負ありしに、同五月和泉國石津といふ所にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道此所にて極りにき。昔の下にもうづもれぬ物としては、唯徒に名をのみぞ留めし。心うき世にもありしかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國なる義貞も、たびく召されしかど上りあへず、させる事なくて、空しくさへなりぬと聞えしかば、言ふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向はしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸

節度 儲の君

(一)伊豆半島の最南端の一角、一名石廊岬。  
(二)愛知縣(尾張國)和多郡の篠島。  
(三)霞ヶ浦。

奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣されぬ。東國の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道の程もかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。となん申されし、異母の御兄も數多ましましたし、同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末、方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の初め、纜を解かれしに、十日餘りの事にや、上總の地近くより空の氣色おどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれたるに、いど波風夥しくなりて、數多の船行き方知らずなりにけるに、皇子の御船のみは障なく、伊勢の海に著かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸國なる内の海に來著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東



めづらか

こはし  
左中將道世

(一) 寝るがうちに見るのみを夢といはなばかなき世をうつと見す(古今集、壬生忠孝)  
(二) 藤原經忠、正平七年(二〇一二年)歿

西へ吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかゞと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後には吉野に入らせましまし、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いとと思ひ合せられて、尊くもありしかな。また常陸はもとより心ざす方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州の守も次の春重ねて下向して、各國に就きにき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。寝るがうちなる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かすく目の前なる心地して、老の涙もかさあへねば、筆の迹さへ滞りぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。

(一) 第十四代  
(二) 第十五代應神天皇

宸襟

(三) 正平二年(二〇〇七年)八月の河内國(大阪府)藤井寺の合戦、同日攝津國(大阪府)住吉阿倍野の合戦  
(四) 足利勢  
(五) 足利尊氏  
(六) 弟直義

昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬすびと世に起りて、四年餘りが程宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべきなかくかくて静まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。

— 神皇正統記 —

一三 最後の參内

さても今年兩度の合戦に京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また峰起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の

一三 最後の參内

空



將軍を輔佐すの役

周章唯熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏國々の催勢なん  
どを向けては、かなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後  
守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ  
向けられける。

足利三代

東宮尉の武定

(一)山城國久世郡  
にある。今の  
京都府淀町  
(二)同國綴喜郡  
八幡町  
(三)藤原氏、男山  
で戦死した。  
(四)後醍醐天皇

京勢雲霞の如く淀八幡に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍  
弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中  
納言隆資を以て申しけるは、父正成、**庭弱**の身を以て大敵の威を碎  
き、先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國  
より攻上り候間、危きを見て命を致す所かねて思ひ定め候ひける  
によつて、遂に攝州、湊川にて討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一  
歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴なはで河内に歸し、死に  
残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即け參らせ  
よ。」と申し置きて死して候。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。

有待の身

は不忠の身

傳奏

(一)後村上天皇

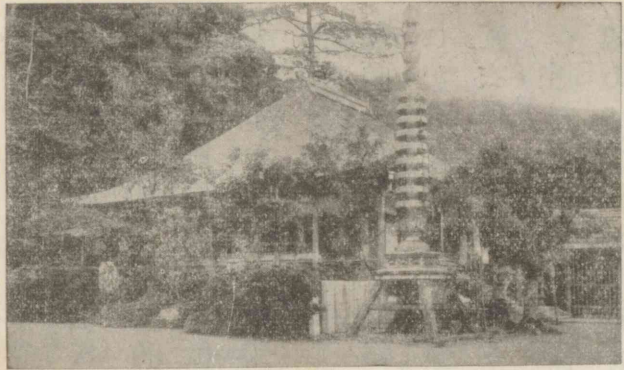
大陽下野の  
乃を三思し、  
て天皇の  
んれなる

このたび我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言  
にたがひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身  
思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲  
には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、こ  
のたび師直、師泰に駈合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行  
が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、その二  
つのうちに戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の  
龍顔を拜し奉らん爲に參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖  
にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、先づ  
直衣の袖をぞぬらされける。

主上乃ち南殿の御簾を高く卷かせて、龍顔殊に麗しく、諸卒を照  
臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つ事を得て、敵軍に  
氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙



敕答  
天皇の御答へ  
對しての答へ



如意輪堂

六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠木將監以下、今度の軍に一

正行、正時、和田新發、意、舍弟、新兵衛、同紀

なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦、天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、唯これを最後の参内なりと思ひ定めて退出す。

如意輪堂 伊藤龍涯筆





(一) 歴史家。臨時  
修室編輯局編  
三年長岡市に  
生れた。

逆修  
ついでに  
ついでに  
ついでに

後

足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、その奥に、  
かへらじとかねて思へば梓弓

なき數に在る名をぞとむる

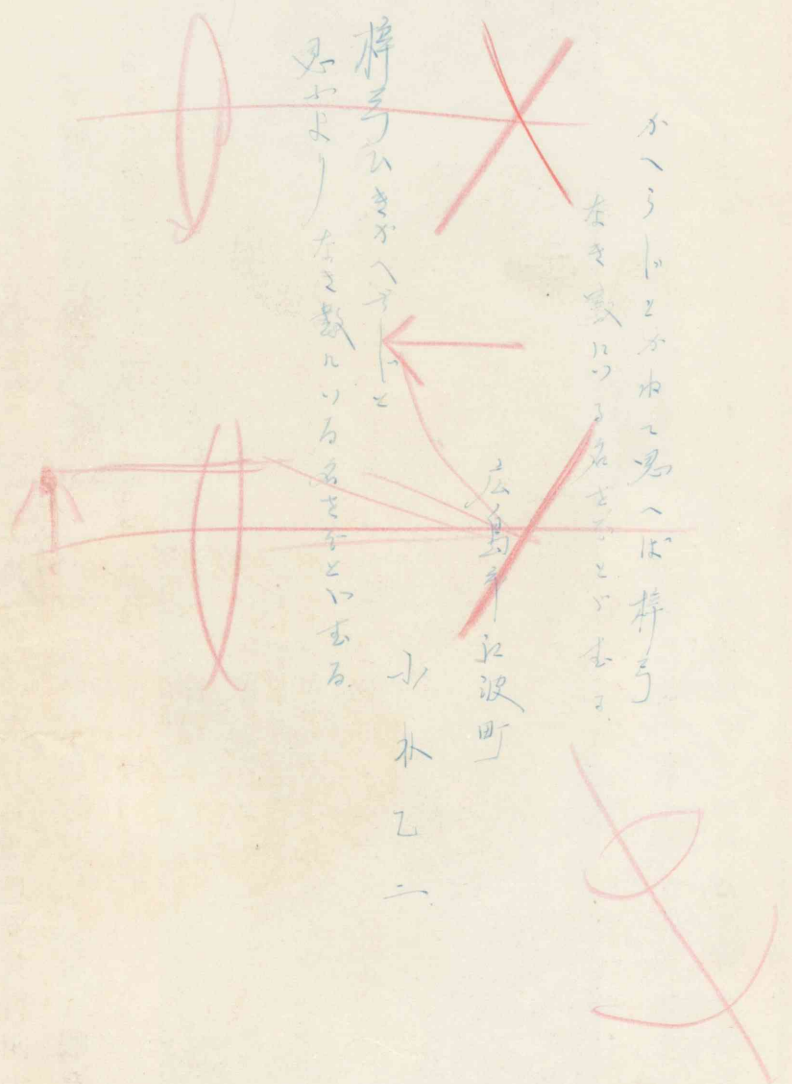
と一首の歌を書留め、逆修の爲と思しくて、各鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。

——太平記——

### 一四 國難と皇室

渡邊幾治郎

一國の危急存亡や、國民の榮辱死生に關した國難に際して、歴代の天皇が全く御身を以て解決の衝に當らせられた烈々たる御精神と御功績とは、國民の何人も感動せずにはゐられない所である。





身を鋒鏑に暴す

(一)第十代

(二)北國は大彥命、東海は武彥命、別命、西海は吉備津彥命、丹波は丹波道主命。

神武天皇の御東征の時には、天皇は御身を鋒鏑にお暴しになり、皇兄五瀨命は長髓彦との戦にお傷はしくも戦死なされた。崇神天皇が天業經綸の大志を懐いて、大規模の邊土拓殖を行はせられようとして、いはゆる四道將軍を四方に派遣なされた時、選ばれた四



(筆邦雅本橋) 皇天武神

人の將軍は、何れも天皇の叔父や甥などの皇族であらせられた。次いで日本武尊は十六歳の少年で、女装して熊襲の本陣に侵入して、その巨魁を誅せられたが、後更に東國を征して陣中に薨せられた。神功皇后は女性の御身を以て、海を航して遙かに新羅を征伐あそばされた。その時皇后は群臣に告げて、征伐は國の大事である。若しこれを汝

カウ夫の先は御自身をサシテ出テニハ...

等に任せて、事が敗れる時は罪は汝等に歸する。これは誠に傷むべき事である。私は女であるから、男装して征伐に従はう。若し事が成就すれば汝等と功を共にし、敗れたら獨り罪を受けよう」と仰せられたので、群臣は大いに感激したといふ。神功皇后の外征は、かゝる尊い御精神を以て行はれたのである。



(筆湖廣橋高) 皇上山龜

が例であつた。政權が武門に移つても、その御精神には變化がない。故に龜山上皇は元寇の難に際し、征伐は武士にお任せになつたが、御身を以て國難に代らうと、大神宮に祈らせられた。

(一)第九十代



世の爲に身をば惜しまぬ心とも 林はごうんになるておらう  
あらぶる神は照しみるらん

とは、この烈々たる御壯心を歌はせられた御製である。後醍醐天皇が北條氏を滅して建武中興の世を開き、次いで足利尊氏に苦しめられ給うた時、天皇と終始艱苦を共にせられたのは、護良親王以下の皇子方であつた。そして護良親王は鎌倉に弒せられ給ひ、天皇は北闕を望んで吉野に崩御あそばされた。宗良親王もまた諸國に轉戦して、朝家の爲に盡させられたが、

君のため世のため何か惜しからん  
すててかひある命なりせば

と、凛々たる犠牲的精神を示された。

江戸幕府の末造、外艦が渡來して開港を迫り、天下紛々として定まらなかつた際、孝明天皇は深く宸襟を惱ませられ、幾度か御寢食

末造

を滅じて神に祈らせられた。宸慮の深かつた事は、實に想像の外である。天皇の御製に

濁った水  
すまし得ぬ水に

我が身は沈むとも

濁しはせじな四方の民草  
とあるのは、實に有難い大御心である。明治天皇は御在位四十五年、一日の如く政治に御精勵あそばされた。日清戦争には大本營を廣島に進め、九箇月の間いと狭き御室に起臥せられて、軍務に御盡瘁あらせられた。侍臣が備へ附けようとした長椅子やストーブをさへ、陣中にはないからと仰せられて、用ひさせられな



(筆造薰南) 皇天治明るけ於に營本大島廣



休戚

かつた。その兵士と艱苦を共にし、國民と休戚を分たせ給うた偉大な犠牲の御精神は、古名將、聖主と雖も及ばない所である。かくの如く、國難に遭つては天皇、若しくは皇后、皇子が御身を以てこれに當り、國家を率ゐさせられた事は、古今に亙つて變らぬ我が皇室の御本領である。さうしてこれによつて、我が國はいつも國難を脱して、今日の進歩發展を遂げる事を得たのである。

明治天皇の御製に

天つ神さだめたまひし國なれば

わが國ながらたふとかりけり

千萬の神もひとつにまもるらん

あをひと草のしげりゆく世を

千早ぶる神のかためしわが國を

民とともに守らざらめや

とある。かうした御信念を以て、天皇は國民と共に國を守らせ給ふのである。今や社會問題の解決を欲し、國民生活の安定を冀うて、とすれば却つてこの祖國を忘れ、聖帝の大御心を顧ない様な者のあるのは、誠に過まれるもまた甚だしいものではあるまいか。

—皇室新論—

自修文

歴代天皇の御製

佐佐木信綱

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる時にあへらく思へば

とは萬葉集の歌で、作者は海犬養岡麻呂といふ一歌人であるが、この歌は單に岡麻呂一人の心を歌つたものでなく、當時文物隆盛を極めた奈良朝の臣民が、前古未曾有の盛代に生れ遭うたこの上なき喜悅の情を歌つたものである。否、獨り奈良朝の臣民の情を歌つたものであるばかりでなく、生をこの盛世に享けて、千

(一)國文學者、歌人、文學博士、明治五年三重縣に生れた。歌集おもひ草、常磐木等の外、和歌史の研究等多くの著がある。  
あへらく思へば、あふことを思へば、(二)傳未詳。



古に比なき聖天子の御治世の下に幸福を享樂してゐる我々の心事を歌つたものとも言ふべきである。それにつけても吾人が絶えず感謝し奉るのは、今上天皇を始め、歴代の天皇の御盛徳である。此所に聊か歴代の天皇が、その時代時代に應じて、國の爲、民の爲に大御心を盡し給うたその餘になつた御製の幾許に就いて、些か回想してみようと思ふのである。

明治天皇が和歌の道に堪能であらせられた事は、今更申すまでもないが、歴代の天皇もまた皆堪能であらせられた。

第一は神武天皇である。天皇は特に勝れていらせられ、賊徒討伐の軍中にお作りになつて、士氣を鼓舞し給うた御製の數首は、古事記や日本書紀に載つてゐる。

神風の 伊勢の海の 大石にや  
細螺の 伊勢の海の 吾子よ 吾子よ  
細螺の 伊勢の海の 吾子よ 吾子よ  
細螺の 伊勢の海の 吾子よ 吾子よ

堪能 深く達したこ  
と上手  
いはひもとほ  
るはひまはつて  
ある。細螺の  
うた。したまの  
みはきさこの  
異名  
吾子よ  
部下の者よ。

撃ちてし止ま  
ん 撃つてしまは  
う。

(一)奈良縣宇陀郡  
にある  
(二)高き屋にの  
ぼりて見れば  
煙たつ民のか  
まどはにぎは  
ひにけり(新  
古今集)

(三)第十六代  
千葉の  
葛野にかゝる  
枕詞  
(四)京都府葛野郡  
百千足る  
數多く富榮え  
てある  
やには(家庭)  
家の群。ひと  
ざと

國のほ  
國の中での榮  
えたよい所  
(四)第四十五代  
節度使  
兵を率ゐて諸  
道を鎮撫する  
官

ほり 撃ちてし止まん 撃ちてし止まん

これは八十梟帥を國見の丘にお討ちになつた時の御製である。剛健勇壯な調のうち、興國の元氣が横溢してゐる。

民のかまどはにぎはひにけりといふ仁徳天皇のは、後人の假託の作であるが、その前代なる應神天皇には、

千葉の葛野を見れば百千足る  
やにはも見ゆ國のほも見ゆ

の御製がある。これは單に眺望の景色を敘し給うたものではあるが、またそのうちに、富榮えた民の有様を喜び給うた意を寓せられたもので、太古の治が窺はれる。

奈良聖代を代表されて、東大寺の大佛に千古の壯觀を留められた聖武天皇が、節度使等に酒を賜はり、歸り來ん日相飲まん酒ぞ、この豊御酒はと歌ひ給うたのを拜誦すると、君臣悅樂せる太平の祥が溢れてゐるのを覺える。



太平の祥  
國の安らかに  
治つためた  
いしるし。  
①第八十二代。  
②第八十三代。  
③第八十四代。  
おどろ  
草木の亂れ茂  
つた所。

④第八十八代。

悠揚迫らず  
ゆつたりと落  
著いてこそ  
つかない。

をす國  
天皇の治めら  
れる國。

後烏羽天皇は、御子の土御門順徳の兩天皇と共に、和歌の名手  
であらせられた。随つて、數々の御製のうちには、勝れた吟詠が多  
くあらせられるが、そのうちに、  
おくやまのおどろの下もふみわけて  
道ある世ぞと人に知らせん  
の御製は、拜誦して涙の涌くを覺えるのである。  
稍降つて後嵯峨天皇に、  
敷島や大和島根のあさがすみ  
もろこしまでも春は立つらし  
の御製がある。實に悠揚迫らざる趣がある。  
元寇の際、我が國中が驚き騒いだ時、畏くも國の爲、民の爲に大  
御心を惱ませられて、伊勢大神宮に身を以てお祈りになつた龜  
山上皇には、  
あきらけき神の國なるをす國と

圖書寮  
宮内省の一部  
局で、皇統譜、  
陵墓及び墓誌、  
皇室典範、詔  
書、敕書、皇  
令等の原本の  
尙藏、世傳御  
料臺帳、王公  
族譜、圖書の  
保管出納、公  
文書類の編纂、  
保管等に關す  
る事を掌る。  
詞書  
和歌のはしが  
き  
①第九十三代。  
うけやはらぐ  
天地の神々が、  
我が誠意を受  
けいられる。

たのむ心もくもらぬものを  
四方の海浪をさまりてのどかなる  
わが日の本に春は來にけり  
などの御製がある。これ等は御集に出てはゐるが、從來未だ曾て  
世に知られてゐなかつたものである。數年前、宮内省圖書寮の典  
籍を拜觀する事を得たをり、龜山天皇御集の中からこの數首を  
拜誦した時には、實に且驚き且喜んだ事であつた。詞書には、弘安  
に詠ませ給ひける百首の中に」とある。  
後伏見天皇に、  
民やすく國をさまりてあめつちの  
うけやはらぐるこゝろをぞ知る  
の御製がある。三四の句は實に尊い句と申し奉るべきである。  
後醍醐天皇も、また勝れた御歌才を有せられた。  
身にかへておもふとだにも知らせばや



(一)第九十八代

たみの心のをさめがたさを  
の御製を拜すると、大御心の程がおしはかられて恐多い事であ  
る。  
長慶天皇には、



後水尾天皇

鳥の音におどろかされて  
暁の寝ざめしづかに  
世を思ふかな

(二)第九十八代  
後水尾天皇の御撰著には集外三十六歌仙、鷗外集、御抄等がある。  
(三)順徳院の御撰著には八雲御抄、禁秘抄等がある。  
八つのはえびす、八壁即ち南方のえびす八種、此所は單に秋の意

るが、御歌も素より勝れていらせられた。御製のうち、  
今こそは袋にはせめあづさ弓  
八つのはえびすも皆なびき來ぬ

(一)第一百十二代

名あるもの  
一藝一能に秀  
でて世に名の  
高い者

あだし國  
海外の異國

は、簡素輕妙のうちに御意氣の盛んなるものが見えて、英明の御  
氣象が察し奉られる。靈元天皇もまた御名吟を多くお遺しにな  
つた。

名あるものはやがて雲居に聞えあげよ  
きゝて我が世のたのしびにせん  
へだてなき我が日の本の光をば  
あだし國まであふがざらめや  
我が國の風をぞあふぐ高麗人も  
ことし千里のなみぢわけてきて  
うちなびく民の心ののどけさや  
をさまる國のもつつ春風  
あふぐかな神の御代より世々たえず  
しるせる國の史のかしこさ  
これ等の御製は、何れも眞淵、宣長等、近世國學者の愛國的和歌の



騷擾  
とさわがしいこ

九重のみはし  
のさくら  
業宸殿の南階  
の側にある左  
近の櫻

始をなされてゐる。幕末騷擾さうざうの時代に、明治維新の基を立てさせられた孝明天皇には、

ものゝふも心あはせて秋津洲の

國は動かずともにをさめん

戈とりてまもれ宮人九重の

みはしのさくら風さわぐなり

この國は日の本なれば日かげより

花うぐひすの春ぞ見えゆく

などの感慨深い御製がある。

以上歴代天皇の御製を誦しまつるに、何れも或は平和の時に際し、或は亂世に當つて、民を慈あやしみ國を憂へ給ふ大御心の迸り出でたもので、我等臣民をして感激措く能はざらしめる。上にはこの聖天子の相繼ぎ相承け給うた連綿たる皇室を戴き、下にはこれにこたへまつる忠良の臣民を以てした我が國が、世界無比

の國體を形成し來つて今日に至つた次第は、此所に明らかなものがある。 — 和歌百話 —

一五 自ら助くる者

永田秀次郎

昔時秦の始皇帝が六國を滅して天下を統一し、阿房宮を造つて驕奢を極めてから、俄に死ぬ事が厭になり、不老不死の藥を海内に求めたが、生憎と急に見附からないうちに、南方旅行中病氣に罹り、聖壽漸く五十にして崩御した。帝はまた易姓革命を厭つて、秦の天下を萬世に傳へる事を希望し、自分を始皇帝と言ひ、子孫が第二世第三世より萬世に至るべき事を定めたが、皮肉にも帝の崩御後僅かに三年にして二世皇帝がその臣の爲に弑せられ、四年目には三世皇帝が漢の高祖に降参して、秦の國が滅びてしまつた。秦の始皇と言へば、支那第一の豪傑と言はれる人であるが、その豪傑が天下

(一) 佐佐木信綱著  
和歌に關する  
隨筆研究百篇  
を輯めたもの  
大正七年東京  
博文館發行

(二) 政治家、貴族  
院議員、俳人  
青嵐と號する  
明治九年兵庫  
縣に生れた。

(三) 西紀前二一〇  
年  
易姓革命

(四) 劉邦



（一）新約聖書マタイ傳第六章第二十九節（Solomon）は昔西シリアの南西部に於つたイスラエルの王國第三代の王その治世はイスラエルの全盛時代であつた（西紀前七〇三年）

の權力を以てしても、やはり正當の道を踏まないで無理な注文をする事は、全くだめであるといふ事を、痛快に教へてくれた。ソロモンが一代の榮華も、竟に野生の百合に如かず。これでこそ神様が、我々に取つて有難いのである。  
然るに世の青年の中には、往々秦の始皇にも劣らぬ無理な注文をする者がある。自分が勉強せずして立身出世を望んでみたり、或は自分が努力せずして、郷里の先輩の引立によつて、一足飛に好位置を得る事を考へたりする。かくの如き事を夢みる者は、恰も權力も智力もない始皇の模造品が、立身出世の仙薬を需める様なもので、實に憫むべき話である。世の中には、一等の富籤を當ててみたいと、夢の様な事を考へてゐる人もあるが、斯様な都合の善い注文をつける人を、西洋の諺では、燒鳥が口の中に飛んで來るのを待つ人とか、または、雲雀を捕へようとして天の落ちるのを待つ人とか言

つてゐる。

故に私は茲に青年に告げたい。諸君等の立身出世には、何等の妙法がない。唯自ら助くるあるのみである。自ら勉強し自ら努力して、自己の運命を開拓する外に、出世の妙薬はないのである。立身には妙法なし。先づこの一語を信ずる事が、立身の第一歩であつて、そしてまた立身の最後の秘訣である。

古人も、凡そ事の成るは、成るの時に成るにあらずして、必ず由つて來るあり」と説いてゐるが、西洋では、神様の辭書には偶然といふ文字なし。と言つてゐる。何事をも知つてをられる神様の眼には、別に偶然とか、不思議とかいふ事はない。すべて當然の原因のある所に、當然の結果が生じてゐるのみである。よく怠惰な學生が、平素勉強もせず、にゐながら、試験間際に徹夜の勉強をしたり、または巧に試験問題を推測して、僅かの勉強で奇功を奏する事を考へたりす

奇功を奏する



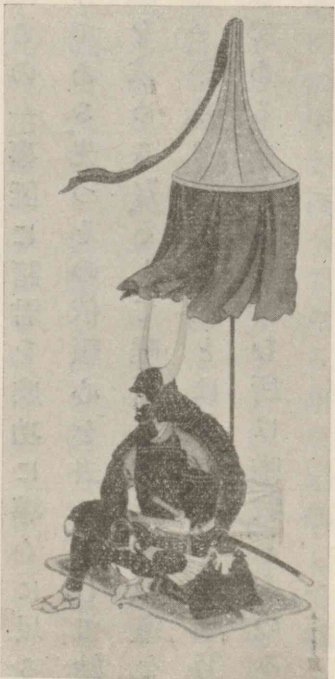
(Robert Koch) (黒死病) 細菌學者。細菌學の功績。研究上の功績。コレラ菌等を見出した。西紀一八八四年。



る。世間にもまた往々、平素注意さへすれば、何事もなく済むべき事をうち棄てて置いて、事件が発生すると俄に狼狽し、刃を渡る様な藝當を演じて巧に危険を免れ、得意顔をしてゐる者が多い。この種の巧妙は、實に愚かな巧妙である。青年の學ぶべき事は、この様な愚かな巧妙ではなくて、賢い平凡でなくてはならぬ。  
「圍碁の格言に、名人に妙手なし」といふ事がある。即ち名人は常に正々堂々一手をも忽にしないから、自然の大勢で平々凡々に敵に勝つのである。故に妙手を出して奇功を奏する必要がないのである。嘗て我が國にペストが流行した。その時ドイツから有名な醫者コッホ博士が來朝した。我が國の朝野の人が擧つてこれを歓迎して、謹んでその教を請うた。博士は種々研究した結果、教を

(徳川氏の世子) 直勝の長子。關原の陣役。大坂夏の陣に功あり。淀城に封ぜられた。寛文八年(一七二八年)歿。八十二歳。  
(徳川氏の世子) 直孝の第二子。大坂冬の陣に功あり。後近江彦根に封ぜられた。享和三年(一八〇三年)歿。三十七歳。

垂れて曰く、ペストを豫防するには、鼠を退治するのが近路である。凡そ生物を退治するには、その生物のうち勝つべき他の生物を繁殖せしめるにある。故に鼠を退治するのは、猫を飼養するにある。この事であつた。私は當時地方の警察部長として防疫に従事してゐたので、成程眞理は平凡なものであると、大いに感心した。これに似た話は昔もある。嘗て江戸時代に、永井信濃守尙政が老中となつた時に、井伊直孝に教を請うた。直孝は容易に教へない。遂に齋戒沐浴七日の後に、烏帽子直垂の大禮服を着用して、謹んで再び教を請うた時に、直孝は端然としてこれに告げて言ふ、唯油斷大敵の四



(筆音頼堀小) 孝直伊井



字を忘るな。尙政もまた深く感謝して退出したといふ。私はこの物語を聞いた時も、また成程眞理は平凡なものであると思つた。

眞理は常にかくの如く平凡なものである。故に若し世の青年が、眞に立身に妙法なしといふ一事を、心肝に銘して奮起するならば、



この一事既に諸君を成功に導くに足るのデである。先づその依頼心を去れ。決して妙法一を求めぬな。そして唯平凡な眞理の道を歩め。平凡な眞理の道とは何であるか。唯努力である。我の眞に恃む所は唯我あるのみである。

ある。

アレキサンダー・デュマ曰く、「我を救ふ者は何所にありや。曰く、爾の側にあり。これを知らずして他に求むれば、これより難き事なし。これを知りて自ら求むれば、これより易き事なし。これは面白い言

Alexandre Dumas  
フランスの小説家、西紀一七八〇年十一月一八

葉である。眞に自己を救ふ者は、唯自己あるのみである。この一事をいかなる程度にまで深刻に理解するかといふ問題は、やがてその人がいかなる程度まで成功するかといふ問題である。若し此所に人があつて、自分の頭上に帽子を被つてゐる事を忘却して、頻りに部屋や押入を捜し廻つてゐるとしたら、天下これ程滑稽な事はあるまい。しかしながら、今日の青年にして眞に神様の前に立つて、この男を笑ひ得る者が幾人あるであらうか。自分の力によつて自分を救ふ事を考へずして徒に他人に依頼し、自ら努力せずして徒に僥倖のみを冀ひ、賢い平凡の正道を歩まないで徒に愚かな巧妙の間道を走らうとする者は、すべて自己頭上の帽子を忘れて、これを部屋や押入に捜してゐる男と同一である。

天は自ら助くる者を助く。禍福門なし。唯これ人の招く所。聖書に曰く、我を呼びて主よ、と言ふ者、盡く天國に入るにあらず。唯こ

新約聖書マタイ傳第七章第二十一節







心外

合口

(一) 鷹見正長、田原侯に仕へ、漢學、經濟の學に精しかつた。文化八年(二四七一年)歿、年六十一。

しながら、その御先供に當りて打擲せらるゝ事、心外に堪へず、今より何なりと志し候はゞ、いかなる儀にても出來申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆相勤め候者、私子供には候へども、日頃合口にて



渡邊華山(坂内青嵐筆)

候間、この者に相談に及び、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成り申すべしと決心仕り候。さりながら私親父二十年來の持病にて、一日も看病按摩を缺き難く候間、朝夕退食の間これを奉公同様に相心得母の手助け候。その上、兄弟皆幼少にて、七人程もこれあり、唯母の手一つにて、老祖、病父、私共もその日を送り候事

(一) 今東京市板橋區

(二) 今埼玉縣熊谷市  
客死  
(三) 今東京市芝區愛宕山の南にある。禪宗。

故、何分右様の餘裕もこれなく、貧窮は最も甚だしく、筆紙に盡し候所にてはこれなく、これによつて、弟共は寺へ奉公に遣し、または出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣し申し候。一人弟は、私十四歳許の時、板橋まで生別れに送り参り候が、そのをり、ちらちら降來る雪の中を、八九歳にて見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き、別れ候事、今に眼前に見え候如くに御座候。右弟は定意と申し、後に熊谷宿にて、客死仕り候。雷之助と申すは、初め七歳の時、青松寺と申す寺へ奉公に遣し候が、後に御旗本へ養子に遣し候。これを以て食物引足り申さず、養子など申す事にはこれなき仕合故、人皆侮を生じ、先方も何事に就けても里方を侮り候故、終に京都へ出奔仕り候。その後その主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、これまた數年辛苦仕り候爲、かの地にて病氣に罷り成り、歸府後間もなく終に相果て申



し候。

右のあらまし故妹兩人も、一人は遠方へ遣し、一人は貧家へ罷り越し、貧死仕り候。彼是を考へ候へば、その原は皆至貧至困、無策無術に罷り成り候。上親父大病に相罹り候爲、かくは兄弟過半、非業同様の病死仕り候次第に御座候。これにてその初め、困難至極の儀、御察し下さるべく候。私母近頃まで夜中寝ね候に、蒲團と申す物、夜著と申す物引掛け候を見及び申さず、破疊の上にごろ寝仕り、冬はこたつに臥せり申し候。私祖父大病故、高料の藥種、藥禮、日食の麵類等に事缺き、疊建具の外、大抵質物に置盡し、なほ借財親類共にもし盡し候へば、僅か南籙一片の儀にて、身内に當り候山伏の、本所（一）一つ目に住居仕り候方へ、母事唯今生存仕り居り候助右衛門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷り越し、夜に入りて歸宅仕り候事これあり候。その節私洗

南籙

（一）東京市本所區千歳町の舊稱

（一）白川氏 名は景皓

（二）金子氏、畫家、名は尤圭、文化四年（一七四七）歿

足の湯を沸し候とて衣服を焦し、大いに叱られ候事、今に覺え罷り在り候。これによりて高橋文平になほ相談仕り候處、とても學問など致し、儒者に相成り候とて、金の取れ候儀はこれなく、何よりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山（一）と申す畫工へ入門仕り候。この時私十六歳に御座候。然る處、貧人にて附届不行届とて、僅か二年にて師家より斷を受け申し候。私もこの時は、如何仕るべきかと泣沈み候處、親父申し候は、金陵事は大森勇三郎様の御家來につき、その旨申し候は、憐み申すべしと申すにより、弟子に相成り申し候處、金陵殊の外相憐み、少々は出來候様に相成り候へども、半紙を調へ候手段これなく、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、右を以て紙筆を調へ申し候。かゝる間にも學問は仕りたく候へども、何分閑暇これなく、冬に相成り候へば朝七つ



(一)谷氏。畫家。江戸の人。天保十二年(一八四一年)歿。年七十八。  
(二)谷氏。文晁の養子。文晁の元年(一八四二年)歿。年三十八。

(三)文政二年(一八一九年)歿。年四十九。

(四)佐藤氏。名は坦。幕府の儒官。安政六年(一八五五年)歿。年八十八。

時に起出で飯を焚き、その焚火にて讀書仕り候。右は文晁(一)、文一、菅原洞齋など申す者私を憐み、畫道に取立てくれ候節、文晁毎曉起出で畫を認め候話を承り、奮發致し候次第に御座候。右畫事、少々づゝ内職と相成り、稽古出來候様相成り候も、爽鳩先生等の恩澤に御座候。

私二十六歳の元日(三)、鈴木孫助宅にてうち寄り致し候節、私申し候は、何分、上かくの如く御困難なれば、各方も拙者も今より心掛け候は、御政道を扶植致すべき道もこれあるべし。とて、契約致し候。その節、

見よや春大地もとほす地蟲さへ

と申す句仕り候。これによつて一齋(四)へも談じ、學問仕りたく候へども、何分寸暇これなく、夜中にても參り申すべきにつき、御門制の儀は、一齋よりその趣を書取り、親父へ申し遣し、親父よ

(一)田原藩の家老

り(一)村松六郎左衛門殿へ、夜御門限の儀につき願ひ出で候處、六郎左衛門殿より、儒者にこれなくては、御門制の事仰せ出され難き旨御さたにて、終にせつかくの志は挫け候。

熟、存じ候は、上にして君に忠、下にして親に孝、皆これ學問中より出で來り候儀、ましてや上へ忠と申す時は、無學無術にてはかなひ難し。されば愈、以て繪事を専らにし、貧を助け、少しにても親に安堵させ申したしと、これよりは更に一生御役儀相勤め候はん事思ひも寄らず、急にしては親の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成り申すべき一事に思を定め申し候。唯繪事にて推量り候に、繪事すら第一の心と申すものに志一途に立ち申さず候うては、物の形整ひて、落なく見事には出來申さず候。また心ばかりは、やたけに存じ込み候とて、手も心の通りに動き申さず候うては、畫成り申さず候。また手ばかり自



由に相成り候とも、それにて畫出來候と申すには參り申さず。胴體四肢治り申さず候うては、机に向ひ候うても、腹より溢れ出で候様に存じ込み申さずては出來申さず候。これによつて、總身のうち、髮の先、爪の端まで皆畫に相成り候様仕る事にて候。諸侯にして國を治めずして家中百姓に出精致せと令し候とて、服従仕るべき者これあるべきや。また奉行にても、奉行だけの事を盡し申さずして、百姓だけに盡し申すべしとて令し候うても、猶更承知仕らず候。然らば上よりして下足輕に至るまで、治安に志これなくては、何事も出來申さざる如く、繪事も右の通りと相心得候へども、治道の事は如何の事か、審かに辨へ申さず候。然様に御座候へば、繪事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、隨分試み申すべく候。

——華山全集——

(一)江戸時代の儒者、經濟家、名は實、豐後の人。寛政元年(一七四九年)歿。年六十七。梅園三語、價原、梅園叢書等の著がある。

訟事

つたへ(捌)

### 一七 毀 譽

### 三 浦 梅 園



三 浦 於てをや。例へば、訟事あらんに、兩方梅理ありと思へばこそ互にいひ募りてやまざるなれ。これを奉行のさば

負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。また悪しき人なりとも、それに伴ふ人はこれを善しと思へばこそ交はるなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が悪しと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりてその人の善惡も分ち難し。同じ一杯の酒なが



ら、上戸は酔ひて面白き物なりと言ひ、下戸は酔ひて苦しき物なりと言ふ。まして人傳などに聞く人の善惡のさは、おぼつかなき事なり。

昔、人ありて、その子のある寺へ遣し置きけるに、暫くありて逃歸り、住持の事を毀りけるは、我に月代剃れと言ひければ、例の如く剃りけるを、剃り様のわきて悪しとていたく叱りぬ。またある時、我がかはやに行きけるを見て、何とてかはやへは行きし。不届なり。向後かはやへ行くべからずと言ひ、その後、朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするが悪しきとて叱りぬ。すべて理不盡の次第、殆ど困却に及びたり」と語りけるを親聞きて、さりとて出家にも似合はざる事なり」とて、急ぎ山に登り、右の事どもを語りけるに、住持聞きて、「いや、さ様の事にてはなし。常々髪よく剃る故に、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これを見給へ、斯様に頭へ切りこみ候。

かはや(厠)

理不盡

とて傷を見せ、その上、かはやも行くべきかはやへは行かで、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ひし故、これ等の事を返すくも戒め諭しつれ」と言ひけるにぞ、親も理に服して、却つて罪を謝しけるとぞ。

信濃國(一)蕨原(二)といふ所に木あり。遠くより見れば、箒の形の如し。よりにてこれを箒木(三)といふ。されど近づきて見れば、箒に似たる所もなく、うち繁れりとかや。遠きより見聞くと親しく見聞くとは、多くはこの箒木の類なるべし。凡そ人のものを批判するも、我が好む所を譽むるものなり。俳士に歌人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判せさせんに、いかでか公論あらん。同じ路を二人して行かんに、一人は健かにしてこの路近しと言ひ、一人は疲れて遠しと言はん。これ路に違あるにあらず、心に違あればなり。例へば、義經の事を論じて、義經を善しと思ふ人の言はんには、この人誠に幼より常人にてはお

(一)長野縣伊那郡小野川の谷で、古驛路にあつてゐた。



（一）時信の子。宗盛等と西海に走つたが、平家滅亡後、上洛に家滅した。能登に流され、八十八年、同所にて歿した。六十九年、同所

はしまさざりけり。俱に天を戴かざる讐を報せんと、夜々寺を出でて太刀打を學び、遙かに秀衡が人となりを見てこれにより、遂に飛ぶ鳥も落ちんばかりなる勢の平家を二三年のうちに攻滅して、亡父の恥辱を雪ぎ、法皇の宸襟を安め奉り、絶えたる源氏を興し、兄頼朝を天下の武將と仰がしめたり。と言ひ、また義經に不滿なる人は、「成程、この人戦争に一通り自由を得たる人ながら、恣に平時忠の女を納れ、梶原景時とせんなき口論をしたる、大將たらん人のしわざに似ず。然るを都に逃げのぼり、頼朝追討の院旨を申し受け、吉野山にて一人の靜に別れかね、兒女子の涙を絞られし。などと言ふ。かく善しと思ふ人の論と、悪しと思ふ人の論とは、誠に雪と墨との差あるなり。その悪しき所を捨てて善き所を取る、これ人を用ふる道なり。その悪しきをば悪しとし、善きをば善しとす、これ公の論なり。また分相應につきて言ふ事あり。鼠を甚だ大なりと言ふとも、牛の

みえず（蚯蚓）

小さきには及ばじ。蛇を甚だ短しと言ふとも、みえずよりは長かるべし。故に人を善しと言ひて譽むるも、悪しと言ひて毀るも、その場合を考ふべき事なり。 — 梅園叢書 —

一八 敕撰和歌集

窪田空穂

（一）歌人。早稲田大學教授。明治十年長野縣に生れた。青朽葉等の著がある。山河襟帶 更始一新

山河襟帶の王城の地、名も優しい平安京は、繪の様に美しい都であつた。佛教の汚濁を潔めて、更始一新の政治を試みるのには、誠にふさはしい所であつた。此所に入々は善政に恵まれ、治平を樂しんだ。そして唐風の模倣から漸く脱して、我が國固有の文化を生まうとする氣運さへ生じた。その時流に投じて、更にこれを馴致した者は、實に平安宮廷の公卿たちであつた。

平安朝の初期以來、權力を持ち知識を持つてゐた廷臣に取つて、歌はその藝術慾を満す殆ど唯一の物であつた。しかも彼等の多く

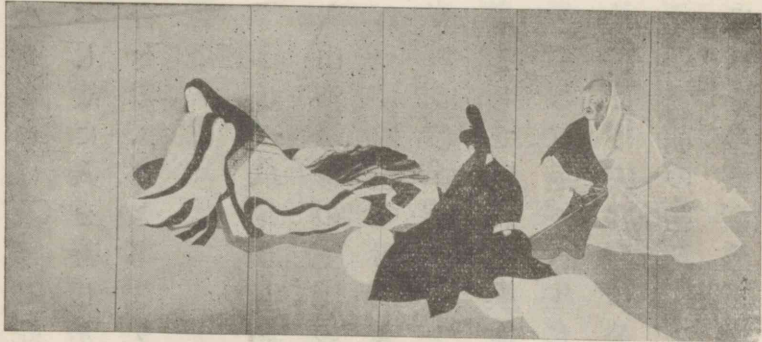


物詣

耽美的

繊細な技巧

拮抗する



六歌仙(寺崎廣業筆)

は、或は殿上に、或は自邸に、或は物詣に、明暮れ安逸單調な生活を送つたから、その耳目に觸れる四季をりくくの自然の變化こそは、彼等の心を刺戟して餘りがあつた。そして風光明媚な平安京の自然の中に、彼等はおのづから耽美的に傾いて行つた。彼等は美にあこがれた。人間生活の上に、自然の風光の上に、一意、美を求め、美を追ふ者となつてゐた。美に浸り得て、彼等は喜び、美を求め得ないで、彼等は悲しんだ。随つて、彼等は機智を愛し、繊細な技巧をも愛する者となつてゐた。そして、彼等は自分たちを壓迫する漢詩と長く拮抗して來たが、今は漢

(一)平安時代の歌人、出羽國郡司の女。  
(二)平安時代の僧。俗名は良岑宗貞。寛平二年(一五五〇年)寂。年七十五。  
(三)在原業平、僧正遍昭、大伴黒主、小野小町、文屋康秀、僧喜撰。



六歌仙(寺崎廣業筆)

詩の長所である思想的な、また複雑した味は、ひをも歌に取入れる様になつた。在原業平や小野小町僧正遍昭など六歌仙と謳はれた人々、更に延喜の世に輩出した紀貫之、凡河内躬恆、紀友則、壬生忠岑などの歌道の名手によつて、和歌は愈々盛んになつて、嘗てなかつた新しい歌風をも生じた。  
春立ちける日よめる  
紀貫之  
袖ひびてむすびし水の凍れるを  
はる立つ今日の風や解くらん  
立春の日に氷が解けるといふ事は、事實としてはないであらう。しかし、それをあ



るべき事とするのは歌人の構想である。その氷は、夏の暑い頃、袖をびしよぬれにぬらしながら掬つて遊んだ水が、冬になつて凍つたものだとする。複雑にしようとして、却つて不自然にさへしてゐるが、また全體の技巧は巧みなものである。これは當時の歌風の一つであつた。

白菊の花をよめる

凡河内躬恆

心あてに折らばや折らん初霜の

おきまどはせる白菊の花

初霜が眞白に置いて、其所に咲いてゐる。白菊の花と一様になつて、何れが霜か、何れが花か分らない様になつてゐる。しかし、推量で折つたならば、或は白菊を折取れようかといふので、甚だしい誇張である。しかしその誇張は、白菊の花と初霜との一つになつた清らかさを、力強く言はうとする耽美的氣分からのものである。

○る。これがまた當時の歌風の一つであつた。かくして和歌道は、咲きひらいた花の様に隆昌を極めた。茲に醍醐天皇は當時の四歌才に命ぜられて、平安奠都以來百年間に、多くの人々によつて詠まれた數ある歌の中から、特に秀歌を選ばせて獻らしめられた。これが敕撰和歌集の嚆矢古今和歌集である。その選抜いた歌は千首餘り、これを四季、賀、哀傷などに類別して、二十卷としてある。

抑、宮廷には尙古の思想が濃厚で、上代を崇び、先例を重んぜられる風が盛んであつた。當時萬葉集は敕撰集であると信ぜられてゐたから、醍醐天皇もまたこれに倣つて、敕撰の和歌集を編ましめようと思し召されたのである。古今和歌集は茲に新たに敕撰和歌集の先例を作つた。そして後代、相繼いで屢、敕撰の御企があつた。即ち何れも時の代表歌人を撰者として、その時代々々の名歌を撰び編



(一) 第百二代。  
(二) 永享十年。(三)  
〇九八年。

古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉詞花、千載、新古今、新撰、後撰、玉葉、新後撰、續千載、續千載、風雅、新拾遺、新後拾遺、新古今、新後拾遺、新

ましめられたのである。  
この敕撰和歌集の編纂は、室町時代後花園天皇の永享年間に出  
來た新續古今和歌集まで、二十一代に亙つて行はせられた。それ故  
これ等の敕撰和歌集を、後世二十一代集と稱する。  
随つて當年の歌人に取つて、最高の榮譽とする所は、自己の歌が  
選ばれて敕撰集を飾るといふ事である。代々の歌人は、敕撰の譽を  
贏ち得ようとして、作歌三昧の生活をした。  
かの平忠度が一門と共に西國へ走らうとした時、特に馬を返し、  
その師俊成卿の門を敲き、一卷の詠歌を託して、この後撰集のさた  
ある時、せめて一首なりとも敕撰の榮に浴さうとした、哀れにも優  
雅な物語は、よく當時の歌人の心情を傳へてゐる。  
和歌が世の治亂を外にして盛んであつたといふ事も、畢竟はこ  
の敕撰和歌集に刺戟されたからであらう。かくして敕撰和歌集は

我が國の文化の上に貢獻する所が少くなかつたのである。  
二十一代集の中でも、有名なのは第一の古今和歌集から、第八の  
新古今和歌集までの八代集である。その中でも殊に名高い古今、新  
古今の二歌集は、實に敕撰集を代表するものであると共に、後世の  
文學に影響する事も極めて深い。  
傳統を重んずる和歌は、平安時代を通じ、古今和歌集の歌風を一  
氣に推進めて、その耽美的方面を愈々複雑な、細緻なものとして行つ  
た。そして王朝の末期に至つてその極に達した。しかもこの頃政權  
は漸く武家に移らうとして、皇室も廷臣も失意の状態にあつた。こ  
の失意を紛らさうとする心は、またおのづから自然へ向つた。即ち  
自然に没入して、その美しさや寂しさを味はふ事によつて、滿され  
ない心を慰めようとしたのである。傳統の耽美的な心と、新たに知  
つた自然の身にしむ様な趣を愛する心とが、渾然たる一體となつ



た。守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに  
藤原定家

春の夜の夢の浮橋とだえして  
みねにわかる、横雲の空

春の夜は短く、見かけた夢が中途で覺めた。見ると、夜峯に沈んだ  
横雲が、今峯を離れて夜明とならうとする所であるといふ。事實  
は單純であるが、心が細かく働いて、複雑なものとなつてゐる。ま

た人間と自然とを一つにしてゐる。何れもこの當時の歌風の一  
つである。

題知らず 藤原家隆

眺めつゝ、思ふもさびしひさかたの  
つきのみやこのあけがたの空

(一) 第八十三代、  
(二) 元久二年、  
(三) 八六五年、  
(四) 土御門、順徳、  
後堀河の三朝、  
に仕へた大納言、  
貞元二年、  
八七年、  
五十七、  
(五) 土御門天皇の、  
朝に仕へて大、  
藏卿に至つた、  
生歿年不詳、  
(六) 蹴鞠の名手、  
和歌を定家、  
學んだ、  
十二年、  
一八八、  
五

寂しい秋の月を眺め、明方になつて月宮殿の明方を想像して、一  
層の寂しさを感じた心である。月宮殿は、支那の傳説にある月の  
中にある御殿の名である。自身の寂しさから、遙かな月宮殿の寂  
しさを思ひやつて、寂しさの深くなるのを喜ぶ。これもこの當時  
の歌風の一つである。  
かゝる風潮の中に生れ出たのが新古今和歌集であつた。即ち鎌  
倉時代の初期、土御門天皇の元久年間、後鳥羽上皇の院宣によつて、  
當時の代表歌人である源道具、藤原有家、同家隆、同定家、同雅經等が  
撰集し奉つたもので、その歌數は約二千、それを二十卷に類別して  
ある。しかしながら、和歌の發達はこの頃を以て極頂とし、政權が全  
く武門に歸すると共に、その氣力の減退するにつれて、歌風も著し  
く衰へてしまつた。  
さはれ王朝の文化に燦然たる光彩を添へた古今和歌集に端を



發して、二十一代相次ぐ敕撰和歌集の出現は千古の偉觀であつた。そして中世國民文學の誇は、敕撰の名によつて一層高められたのであつた。

一九 美しい自然と我が國民性

我が日本程美しい自然をもつてゐる國はない。これは世界の有名な事實である。しかし日本人は、それを唯美しいと見て賞するのみでなく、敬虔の心を以てそれに對する。淺綠色に澄渡つた大空を仰いでも、天際に聳立する富士ヶ嶺を見ても、また清い流に臨んでも、その美しさの上にある偉大性、崇高性、清淨性を認めて、これを神聖な物として崇敬する。其所に日本人の「神」の觀念の根源がある。我が國で「神」と「上」とが同義語である理由も、また其所から發してゐる。

同義語

神はどこの國にもある。そしてそれ等の神廟または教會には、常

主調

祖先崇拜

に參拜者の跡を絶たないが、その神前に捧げられる祈は、皆個人的な幸福の永續を希ふにあつて、日本の様に國家的、國民的ではない。日本人の中にも、稀には病氣の平癒や、一家の富貴を祈り求める者があるが、そんな迷信じみた事は、神に對する正しい態度ではない。我々日本人が神前に拜禮する心持には、もつと高い意義が存在してゐる。即ち、國民生活の平安に對する祈求と、これに應ずる神人の恩徳に向つての感謝とが主調となつてゐる。

現在我が國各地の神社に祭祀されてゐる神々を調べてみると、多くは曾てその地に住んでゐた氏族の祖先神であるか、或は、それ等の祖先たちが齋き祀つた自然神である。それで外國の學者などは、日本人の神社崇敬は、一種の祖先崇拜教であると評するのであるが、それは我が日本國民性の實相を知らない者の評語である。單純な祖先崇拜は、決して我が國の特色ではなく、隣國の支那には勿



個人主義

論臺灣の蕃社にも、遠く離れては古代ローマなどにもあつて、一般に祖先の靈は、その子孫の一身を守護すると信ぜられ、これに對して崇敬が捧げられてゐる。さりながら、それ等祖先神の守護は、同家の子孫に與へられるのみで、他の人々には及ばない。これは支那及び西洋諸國の國民性が、概ね個人主義に基づいてゐる事から來る結果である。我が國の神社崇敬も、祖先崇拜を基調として成立してゐるが、その神の恩寵は一人一家に止らずして、大にしては國家を護り、小にしては一地方の平安を守るのである。故に元來は一氏族の神であつても、これに對して祈を捧げる者は、一氏族限りの繁榮または個人の幸福のみを求めないで、汎く全同胞の爲に、國家の平和、社會生活の安全幸福を希ふのである。これは日本の國民性から來る神社崇敬の一特色である。故に元來は一氏族の爲に建てられた神社でも、これを國家の宗祀として、國家がその管理に當つてゐる。

あらひと神

ると同時に、國家の宗室たる皇家の御祖神を奉祀した神宮にも、庶民の參拜をお許しになつてある。これは君臣一家の我が日本にのみ見られる事實であつて、他の國では、王家の祖神は決して人民を守護せず、人民もまた、これに對して崇敬を捧げないのである。かくの如くにして我が日本では、各氏族それぞれ祖神を異にしてゐても、結局は全日本を一家族とする大團體の祖神の主旨に一致し、その大神の神意は、神統を承けさせられた萬世一系の天皇が奉體あそばされて、國家最高の理想を御實現あらせられ、臣下の重立つた者が、更に帝意を承け奉つて、中央に、或は地方にこれを執行するものと信ぜられた。そこで、古來我が國人は、人身を具へさせ給ふ現在の神の意味で、天皇を現人神即ちあらひと神と仰ぎ奉り、その聖旨を體し奉つて、實際政治を行ふ長官をも、やがてカミと稱してこれを尊敬した。しかもかくの如き特色は、後更に發達して、國家に功勳



(一)京都市上京區  
官幣中社。  
(二)神戸市兵庫多  
聞通。別格官  
幣社。  
(三)京都市東山區  
別格官幣社。

寄與

ある大人物を神として祀るに至つてゐる。藤原鎌足を祀つた談山神社、菅原道眞を祀つた北野神社や太宰府神社、楠木正成を祭神とする湊川神社、豊臣秀吉を祭神とする豊國神社などは、その著しい例である。神を人間から引離して特別高い所に仰ぎ馴れてゐる外国人は、人間を神として祀る日本人の風習を頗る怪しんでゐるが、これも日本の神の本性を知らないからである。道眞とか正成とかの大人物は、決して一個の人間として祀られてゐるのではなく、それが神として尊崇されてゐるのは、國家に對する功勳、國民に對する寄與の爲である。即ち國民文化を高めて、これを人類の最高理想に導き、或は、國民理想の達成を妨害せんとする暴力を排除して、國家の平安を擁護した偉大な働に日本人は神性を認めて、これに崇敬を捧げてゐるのである。この意味から言つて、日本歴史上の偉人英雄は、何れも護國の神として祀られて然るべきであるのみならず、

殉國者

ず、直接間接に文化の發達擁護に力を致した一般國民の祖先もまた、神でなければならぬ。明治維新の際の殉國者を始め、西南役の戦死者、數度の對外戦役の戦死者等の靈を靖國神社に合祀せしめられた聖旨も、其所に存するのである。我々がかゝる神社の前に拜禮を捧げ、神の心を我が身に體して國家の爲、國民の爲に努力すべきは當然の事であらう。

神社の祭神の中にはまた多くの自然神がある。例へば、山の神、河の神、海の神、風の神、雨の神等の類である。これも單に日本に限られた事ではなく、南洋あたりの土民の間に於ても、現に一種の自然崇拜が行はれてゐるし、名山、大川を祀るとか、風伯、雨師を郊祀したとかいふ類の記事は、支那の古書に甚だ數多く掲げられてゐる。しかし、それ等の自然崇拜は、多く自然力に對する恐怖感に原因して、唯恐しい神としてこれを畏敬し、成るべくその被害を少くしてもら

風伯雨師  
郊祀



豊饒

はんが爲に祈を捧げるに過ぎない。ところが我が國では、これ等の神は寧ろ人類生活を擁護し、その幸福を助長する神として信ぜられてゐる。我が日本は古來農業國であつた關係上、農作物の開花時や結實時に於ける風水害、または旱害は、國民生活を脅すものとして頗る怖れられたが、風神、雨神は勿論、山川湖海の神々は、互に相戒めて、かゝる被害から農民たちを防護するに止らず、進んで適當の風雨を與へて、作の豊饒を助成するものと一般に考へられた。即ち此所にも、日本の神は護國神の特性を發揮されてゐるのである。故に日本の自然神は常に感謝の對象であつて、一つとして恐しい神はない。随つて日本人は、黒ずんだ濁つた水の中には神を考へてゐない。各地の傳説を見ても、もの凄しい恐しい様な淵には、ぬしが棲んでゐると言傳へて、魔の淵と名付け、これを魔所としてゐる。泥沼の様な所でもさうである。また山に就いて見ても、恐怖感を起させる

清明心

様な山は、魔の棲む山であつて、神います山ではない。現に今日でも地方へ行つて見ると、古く山神を祀つたと傳へられる小祠や、水神の森と呼ばれてゐる所を見受けるが、それ等は何れも比較的景色の明るい場所にあつて、祠前には清らかな水が流れてゐる。萬葉集その他の古歌に、神山として詠まれてゐる山々を調べてみても、駿河の富士山、越中の立山等、悉く山容のなだらかに美しい、また、うち向つて見まほしい山ばかりである。これ等を考へても分る通り、日本人は單に山または水に神を認めてゐるのではなく、特に美しい明るい山に神を認め、また水の清さに神を認めてゐるのである。これは清明心、即ち清く明るい心を尊重する日本人の國民性から來る自然の結果である。

かくの如く我が國では、神も人も朗かな明るさに生きて、一つ心に國家の平和、民人全體の幸福安寧を圖るのが民族の特色である。



儀禮

故に各地の神社は、古來國家の宗祀であると共に、また國民の爲の殿堂であつて、祭禮その他一町一村の大切な式典は勿論の事、一家の私事でも、成年式とか結婚式とかいふ様な社會性を帯びた儀禮を行ふ時には、村人たちが必ず神前に出て、神にその事を奉告し、神人一致の精神を現したものである。我々の父母がさうした様に、祖父母も、曾祖父母もさうして、國家の爲に、地方の平和の爲に神と協力して、今日の日本を築き上げて來たのである。我々はどこまでもこの祖先の魂の籠つてゐる神の社を守り續けて、神と共に萬民共榮の實を擧げねばならぬ。

二〇 明淨直

五十嵐 力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、「明き淨き直き誠の心」といふ詞がある。我等はこの「明き淨き直き心」が、日本人の性質

(一)國文學者、文學博士、早稲田大學教授、稲田治七、山形縣文生、新田章、新田章、國歌の胎生、及び國語研究等、著がある、(二)第四十二代。

賦與

の核となり中心となるものであると考へる。この詞は代々の詔敕に幾度も繰返されてゐる。しかも重きを措いて繰返されてゐる。その他、古事記、日本書紀、萬葉集などにも、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じた事、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて出たものではあるまいか。世に大和民族の特性と稱せられる現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅などの諸性質は、概ねこの明淨直の三大性質を基本として説明されるらしく、殊に三種の神器がこの三大性質の標章として遺憾がない様に思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を説明しよう。鏡の性は明で、その徳は玲瓏透徹に物を映ずる事である。日本人は鏡の様な明き心で、正しく事物を觀た。故にその觀方は概して公平無私で、赤い者は赤いとし、黒い者は黒いとし、善行に對しては我



折衷性

騎虎の勢

を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は鏡を齎きて、我が大御前を見るが如くせよ」と仰せられた。全國無數の神社には、鏡が神體として齎かれてある。詔敕や祝詞や、乃至、君臣應對の詞などに、「明き心」といふ語が澤山用ひられてゐる。これ等は何れもこの性質が、我が國民の心底に根深く植附けられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治、社會、宗教などの諸方面に互つて、諸外國に見る様な非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、またいつもそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新たに外國からはいつて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがてお互にそれには道理も無理もある事を解すると、ばからしくなつて、最早争論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停

(一)新納武藏守忠元  
 (二)新納忠元の作  
 (三)エルサレム聖地を回教徒であるトルコ人から奪ひ還す爲に起した戦役(西紀一七〇九年)  
 (四)右肩に赤十字の徽章を附けた故にこの名がある  
 (五)西紀一七八九年佛蘭西の革命の時一起つた革命  
 (六)西紀一七九五年に鎮定した  
 洞然

をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騒亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣、父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が文藝の奨励に骨折るのも、群雄割據の亂世に陣中かゞり火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に敵ぞとて何かは人の憎からん同じ御國の同じ身なればと詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡すのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見る事が明らかであつて、理に従ふ事が流れる様な根本性によるのではあるまいか。大和民族は十字軍やフランス革命の様な極端な狂言を演ずるのには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正と言ひ、理に鋭いと言ひ、感情の平靜を保つと言ひ、何事も受容れる胸懷の洞然たる人種であると言つた外人の批評は、



濁濁

あながちでたらめの空世辭ではないと思ふ。清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが、同じではない。その違ふ趣は、丁度、鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢濁濁を忌む事は、清明共に同様であるが、清はそれ以上に味はひのあり温かみのある事を要する。譬へば、鏡は空白で正しく物を映すれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映する事を要しない。温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のある事を要する様なものである。本来日本人は、明らかに事物を見る長所を有するばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は空白の明ではなくて、温潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶、夜光珠の明である。我が國では、古來、禊祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞、宣命を始めとして、多くの歌詠、謠諷は明き心を現しながら

澄徹の趣



筆滿野真花挿中陣



むくつけし  
かざす(翳)

審美眼

ら、趣味、風韻に富んでゐる。しかもその趣味や形容が、諸外國、例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎の様な誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花をかざし、歌詠を贈答し、或は胄に香を焼きしめるといふ様な嗜があつた。上流社會は言ふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文字をもつてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬ者はなく、そしてこれは外國の労働者に絶えて見ない所と言はれてゐる。大工、指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えない裏面にまでも手を盡すといふ嗜がある。これ等は何れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は、日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆



首鼠兩端

美術を愛翫す。と言つた一外國人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふのである。直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。その厭ふ所は躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲る事、拗れる事、邪な事である。叢雲の劍はその標章としてこの上なくふさはしい。元來直の徳の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見た所を意が直進して實現する。そして知の見方、意の働き方に、潔くて言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格と言ふべきであらう。明き心を以て父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし。故にその明き心の示す所に従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば「八隅知し大君」現つ神として國に臨み給ふ様が、限りなく高く貴い。

(一)父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし。云々(萬葉集、山上憶良)

(二)海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍。大君のへにこへり見はせじか(萬葉集、大伴家持)

故に直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公を致すのである。そしてその君父に事へ、妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮、分別、利害勘定の結果でなく、眞實掬すべき趣があつた。此所が眞淵宣長等の國學者の感歎し、自負して措かなかつた點である。無論どこの國にも、文化の進まぬ時代には、斯様な自然的の性向があつたであらうし、大和民族にも利害勘定の行爲がなかつたとは言はれないであらう。また自然眞實の行爲に弊害が伴はなはなとも言はれないであらう。けれど、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存した様に思はれる。その例は、遠い昔では、素戔嗚尊に見る事が出来る。あの日本武尊も素戔嗚尊系の勇者である。次いで、鎮西八郎爲朝の腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも素戔嗚尊系の大立者。これ等何れも向ふ見ずの様でありながらも、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば、水火も







投影 った影  
北歐神話 古代のスカン  
チナビヤ(今  
のスウェーデ  
ン、ノールウ  
エ、デンスマ  
ク、イスラン  
ド等を含む)  
に傳はつた神  
話  
印度の神話 印度に移住し  
たアールヤ民  
族の間に發達  
した神話

あるが、同時に太陽神として崇敬されてゐる。太陽は光明の本源である。國民信仰上に於ける最大最高の神を、光明の本源である所の太陽と結び附けてゐる所に、我が國民の光明を尙ぶ精神が十分に現れてゐると思ふ。我が國民が古來白色を尙んで來た事、殊に神道に於てそれが著しい事も、白の色がもつ所の明るさを尙ぶのである。勿論神道に於ては、清淨を尙び、その無垢無染といふ清らかさを尙ぶ所から來てゐるのでもあるが、明るさといふ事もある。否、清らかさと明るさは元々共通のものである。國民思想、國民信仰の投影とも言ふべき神話そのものが、既に光明を尙ぶ精神的特色を表現してゐる。明るく朗かな氣分。——これが我が國の神話のもつ最も著しい特色であつて、他國の多くの神話に見る様な陰慘な氣分は少しも現れてゐない。北歐神話にしても、印度の神話にしても、陰慘な物語が可なり多く含まれてゐるのであるが、我が日本の神話には斯様な物語は殆どない。

黄泉國 夜見國と同じ、  
暗黒の世界で、  
死の國を指す。  
常闇 永久に暗黒な  
こと。  
さばへなす 五月の頃の蠅  
の様に。  
荒ぶる神 亂暴する神  
八百萬の神々 國民の祖先で  
ある無數の神  
神  
天の安の河 彌瀨の河、即  
ち瀧瀬もある  
廣い河。或は  
銀河と言ふ。  
常世の長鳴鳥 (常闇に同じ)。  
長鳴鳥は鶏の  
こと。  
世をはかなむ 世の中を定め  
なく思ふこと。  
無常を感じる  
こと。

我が國には光明と歡喜とに満ちた高天原の神話はあるが、かの佛教などでいふ暗黒陰慘な地獄に相當するものは認められない。死者の行くべき世界として黄泉國の物語はあるが、決して地獄物語に對比すべきものではない。光明の神天照大神が天岩戸に隠れまして、天の下が常闇になつた時には、さばへなす荒ぶる神々が所を得顔に荒びて、國民は大いに困つたのであるが、國民はかくの如き際に於ても、決して屈託したり、悲觀したり、失望落膽したりする事はなく、八百萬の神々は直ちに天の安の河原に集つて、盛んに火を燎やし、黎明を象徴する所の常世の長鳴鳥を鳴かしめ、天鈿女命をして滑稽な舞踊をなさしめ、八百萬の神の笑ふ聲が高天原を揺動かしたとある。勿論これは神話物語であるが、斯様な神話物語は、光明を尙ぶ國民の精神から生れたものである。かるが故に、國民は樂天的である。常に物を明るく見る。世をは



かなむ思想は元來ない物は見方によつて明るくも暗くも見え  
る。すべての物を明るく見るのが日本國民の特性である。悪人は  
すべての事がらを悪意に解し、善人はすべての事がらを善意に  
解釋する。自ら明るい心持をもつてゐる者は、すべての事がらを  
明るく見るのである。

御民われ生けるしるしあり天地の  
さかゆる時にあへらく思へば

(一)平安時代の文  
學者清原元  
輔の女一條天  
皇の中宮定子  
に仕へた。  
(二)面白季節は  
正月三月、四  
五月、七月、八  
九月、十一月、  
十二月である  
が、總體その  
季節々々につ  
いて一年中皆  
面白いと意

この歌こそ、日本國民の物の見方を代表したものである。勿論  
一種の厭世思想の發生した事も否定する事は出来ない。しかし、  
それは多くは佛教の厭世的な思想の影響である。平安時代の貴  
族が頹廢的な暗い思想に陥つてゐた事は、當時の物語類を見れ  
ば直ちに看取される。しかし、同時代の清少納言はその隨筆枕草  
子に(三)ころは正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをり  
につけつゝ、ひとゝせながらをかし。と言つて、日本人特有の明る

(一)比叡山の東塔  
の本堂。當山  
最初の建立。  
國寶建造物で  
ある。

い見方をしてゐる。これが本來の日本精神なのである。  
今一つ日本國民の光明を尙ぶ精神を現してゐるのは家屋で  
ある。殊に我が固有建築の典型であるとされてゐる神社建築に  
於てそれが著しい。概して宗教に關する建築物には陰鬱な物が  
多い。キリスト教會の如きは宗教的建物としては明るい方であ  
るが、普通の我が國の家屋に比較すると、餘程陰鬱に出來てゐる。  
佛教の寺院建築に至つては一層それが甚だしい。就中、天台宗、眞  
言宗などはその極端な例である。天台宗の總本山延曆寺の根本  
中堂に參詣した人は何人も知つてゐる事であるが、案内者は日  
中でも蠟燭を點して案内する。それ程暗く出來てゐるのである。  
佛教で極樂淨土の事を一にじやくわう寂光土と言ふ。寂光土は後世發達し  
た佛教では色々むづかしい理窟を附けてゐるが、本來の意味は、  
幽かな光の國といふ事である。光明よりも寧ろ薄暗いのを理想  
とする考へ方から、極樂淨土を寂光土と言つたので、天台宗や眞







造詣  
一頭地を抜く

法弟  
次成縣眞壁郡  
樺穂村櫻井に  
ある曹洞宗

郎は下駄を懷にして眞壁の地を去れり。鬱憤の餘り、一刀を領主の頭に加へんかと思ひ込みしも、いやと思ひ返して、平四郎は傷だらけの頭を圓めて僧となりぬ。鬱憤化して金鐵の意志となり、佛道の造詣見る／＼一頭地を抜き、支那に渡りて徑山寺に學び、苦修九箇年、奴僕此所に絶代の名僧と化せり。歸り來りて到る所に歓迎を受くも、その領主その徳望を慕ひ、禮を厚うして招き寄せ、上座に請じて慰勸を極む。一禮終りて、平四郎は懷より下駄を取出して、これを御記憶あらせらるゝや」と言ふ。さては今日の名僧は當年の賤僕なりしかと、經明雪の日の事を想ひ起して、悔悟色に現る。臣の今日あるはこの下駄の恩なり。今尊顔を拜して欣喜に堪へず」と言ふに、經明益、その高風に敬服し、自ら進んで法弟となり、傳正寺を建て、平四郎を開山とせり。平四郎も平四郎なれば、經明も經明なり。平四郎が下駄取の賤僕より身を起

(一)天台宗の僧、  
延曆寺第三世  
の座主。名は  
圓仁。下野の  
人。貞觀六年  
(二五二四年)  
寂、年七十一。  
(二)北條時頼、北  
條第五代の執  
權。弘長三年  
(二九三三年)  
歿、年三十七。

して絶代の名僧となりたる事のみにて、も古今に傑出す。殊にその骨髓に徹せし遺恨を向上の道に轉じて、舊主の無道を恩視する心事に至つては、人間の高さを窮め、人間の清さを盡し、人間の域を離れたり。經明が前非を悔い、領主の身を以て舊僕の法弟となりたるも、普通の人間に出來得べき事にあらず。平四郎は稀代の傑僧なり。經明もまたまさしく尊き人なり。浮世の榮華、平四郎にありては塵芥に同じ。舊領主の崇拜を受けて堂々たる伽藍に生佛と仰がるゝも、平四郎は却つて俗累に堪へず、飄然去つて、陸奥國松島の巖窟にその身を託せり。松島に遊びたる者は、瑞巖寺の前に法身窟あるを見しならん。これ平四郎の棲居せし所なり。この寺もと慈覺大師の開ける所、宗派は天台宗にて、松島寺と稱したるが、鎌倉の世になりて墮落を極めたり。時頼行脚して此所に來り、一宿を求めたるに、寺僧拒んで入れず。この窟に平四



(一)青森縣上北郡

七戸町

(二)仙臺藩祖

寛永十三年(一六三六)

年七十六(一七〇二)

面目を發揮す

(三)上北郡大深内村字洞内



法身國師

郎と相逢ひてその高德に感じ、鎌倉に歸りて後、在來の天台宗の僧を追ひ、寺の名を圓福寺と改め、禪宗の寺とし、平四郎を開山とし、朝廷に奏請して、平四郎に法身國師の尊稱を賜はるに至らしめたり。平四郎此所に益尊き地位を得たるも、なほ俗累に堪へず、去つて陸奥國七戸に近き倉岡に隱棲せり。圓福寺は伊達政宗改めて瑞巖寺と稱し、禪寺として今日に至れるなり。一たび眞壁を去り、二たび松島を去りて、平四郎の毫も世榮を求めざるは、益禪僧の面目を發揮して、高風千古の下に躍如たるを覺ゆ。經明は主從四人平四郎を慕ひ、尋ね廻りて遂に倉岡にて邂逅し、共に棲めり。かゝる程に、平四郎は洞内の豪族洞内由之進の懇請により、移りて此所に法蓮寺を開けり。經明

は僧名を道無といへり。平四郎の木像を刻みけるに、平四郎もまた經明の木像を刻めり。二像今現に法蓮寺に存して、當年の高風を傳ふ。



道無和尚

晴天に草履、雨天に下駄、同じく履物なるが、その履物取より身を起し、無たる者、俗界に猿と稱せられたる豊太閣あり、法界に眞壁平四郎を見る。平四郎の高きは豊太閣の大いなると兩々對立して、我が國の歴史に異彩を放つに足れり。余は平四郎をしのぶにつれて、豊太閣を聯想せずんばあらざるなり。

おなじくも履物取りし身の上の  
猿は太閣眞壁は國師



〔一〕江戸時代の儒者、博物學者、筑前の人、正徳四年（一七三四年）歿、八十五、大和本草、慎志録、大和俗訓、樂訓等の著がある。

心づからつとめて

四つの始め

はだれ

春は先づ一夜の程に、あらたまの年立返る朝の空の光、心づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて、貧しき家にも春盤などいふ物を設く。また土器取出で、大御酒進めて、先づつとめて父母にことぶきし、次に自ら祝し、賓客にももてなす様など常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。時は今は四つの始めなれば、空の景色やうくひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山邊に霞の薄くたな引ける、さまざまのものけざやかに見えて、冬の空に立變れる装、先づ春の來れるしるしあらはなり。垣根隠れに冬より残れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名残を惜しむべし。待ちわびし梅の句、百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の、春を迎へてももの若き聲、初春の初音の今日に逢へ

二二 春の樂しみ

貝原益軒

〔一〕花ならで身にしむものは、鶯のかたはらぬ聲のほかに、風雅集、道因法師の常磐なる松の緑も春來れば、今一入の色まさりけり（古今集、源宗于）  
〔二〕韓愈のこと。唐の文豪。字は退之。長慶四年（西紀八二四年）歿、年五十七。  
〔三〕早春呈水部張十八員外詩句。  
〔四〕清少納言。一日の光藪しわかれば、いその上ふりにしけり（古今集、布留今道）  
日永くして少年の如し

る、耳とまりてこひしく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むはこれ先づ春の賜なり。これを始めとして、なほ行くさき遙かに榮ゆる春の豊かなる惠たのもし。千年も経べき緑の松も、今一入の色を増して、常に見馴れしもいや珍しくなづさはれぬ。韓文公が最是一年春好處と言へりしは、早春のけしき、一年のうちにて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。  
如月の程より、萬づ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたる装、殊に曙の景色譬ふべき物なくあはれむべし。古への人、春は曙と言ひけんも宜なるかな。日の光藪しわかねば、數ならぬ垣根の内も、冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になり、もて行けば、人の業も古年より暇ありていそがはしからず。日永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗かに



老いみいはけ  
み

(一)周代の哲學者  
莊子、孟子と  
同時代の人。  
(二)唐の詩人杜甫  
同じく唐の詩  
人杜牧に對し  
て老杜と稱せ  
られる。  
(三)題、香中院  
壁の詩句。

消えがて

霞みわたりたる景色いと遙けし。夕づけて日は既に入りぬれど、残れる光なほ久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は陽氣の昇るけにや、童ども紙鳶しやんといふ物を作り、長き絲つけ、風に任せて放てば、高く上り、雲の上まで遙けくたなびくを戲とすれば、老いみ、いはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野にはまた遊絲(一)といふ物霞の如く地より立騰れり。またかげろふとも言ふ。莊周はこれを野馬と言ふ。老杜が詩に「落花遊絲白日靜」と言へるもこれならし。これ皆常にはなきものなるが、春めきていと珍し。また垣根の草早く萌出づるを見るにつけても、春の氣は下より昇るけぢめいと明らけし。花もやうやう咲續きて、梅花既にうつろひて後新たなるは、我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたなびく雲の面影に立つ心地す。李白きは消えがての雪の梢に残れるかと見えて、いと麗し。櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かして、え

けおさる

(一)續古今集、藤  
原爲家の歌。

うしろめたし

ならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花(二)は皆けおされぬ。されど日ごろ待たせくく、てやうく、咲けるが、飽くまで見る程もなく、疾く散るはまた恨めし。

(一) よしさらば散るまでは見じ山櫻

花のさかりを面かげにして

と古への人の詠みけんも、後の思出にせんとにや、情深し。このをりから春雨のしきく、降れば、我が宿の園の櫻はいかにあるらんとうしろめたし。柳翠に花紅にして、春の色を描き出せるは、いと麗しき眺なり。

春やうく、深くなれば、風やはらかに日暖かに、百草芳を争ひ、群花艶を競ふをりなれば、何れの所か春のなからんや。かゝる景色に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあく



(一)「憶幼子」の詩句。

(二)宋の人。名は捕。希夷は號。太祖に仕へた。

(三)歸隱の詩句。

(四)蘇東坡の「春夜」の詩句。

(五)宋の人。林希逸の詩句。

(六)「あたら夜の月と花を同じくは心知れらん」に見せばや。後撰集、源信明。

(七)宋の人。周弼の詩句。

がれ歩き、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しき事のあるが中なるその一つなるべし。我が心の樂しみを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みて、そぞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきもこのをりなり。杜甫が詩に、鶯聲暖正繁<sup>(一)</sup>と言ひ、陳希夷が野花啼鳥一般、春<sup>(二)</sup>と詠ぜしも、皆この時なり。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に酔ひて、二つながら兼ねたる樂しみ、春宵一刻直千金。花有清香月有陰<sup>(三)</sup>。といふ詩を思ひ出でられぬ。また惜花朝起早、愛月夜眠遲<sup>(四)</sup>と言へり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。また夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くる事おそきは、花を惜しまざるなり。この頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば春風

(一)白居易の「古原草送別」の詩句。  
(二)支那南北朝時代の詩人謝靈運が夢中に得たといふ詩句。  
(三)京都府(山城國)綾喜郡山城吹の名所。  
(四)目かれせずながめがちなり。

(五)巨勢山のつらつら椿つらつらに見れどもあかす巨勢の春野を、萬葉集、阪門人足、いどまし。

入<sup>(一)</sup>燒痕<sup>(二)</sup>と言ひ、また野火燒不盡<sup>(三)</sup>春風吹又生<sup>(四)</sup>と言へるも、燒野の草を詠ぜしなり。古詩に、池塘春草生<sup>(五)</sup>と言へりしは、この頃の眼前の景色を唯ありのまゝに言へるなるべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手の渡も見る心地して賑はしければ、目かれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、唯山茶のみ異花にかはりて盛り久し。殊更つらをなして植ゑたるつらく、椿つらくに見れども飽かず。階のもとの薔薇も夏を待ち顔なり。

すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遅く疾く咲續き、酴醾に至りて花の事終りぬるは、名殘惜しと見ゆ。春の花は何れとなく咲出づる色、殊に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるは怨めし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨もまたしげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とゞめあ



〔一〕惜しめども春の限りの今日にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」と言へる、うべなるかな。

— 樂訓 —

〔二〕宋の文豪蘇軾、號は東坡、子瞻はその字、徽宗の初年（西紀一一〇一年）歿、年六十六。

〔三〕源義經。

尋常に飾る

柳の五つぎぬ  
舟のせがい

へぬ春の限りの今日の日の夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」と言へる、うべなるかな。

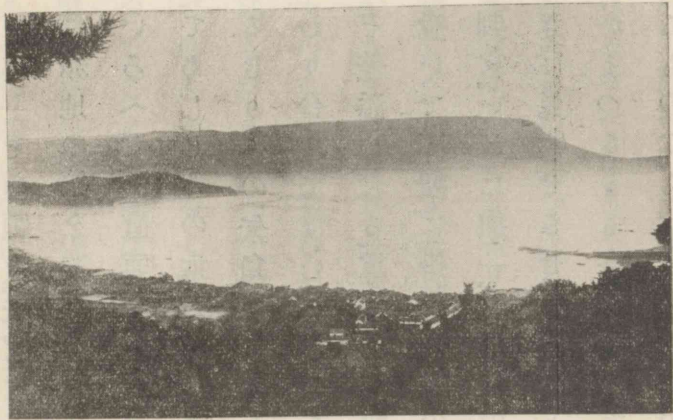
二三 那須の與一の事

さる程に阿波、讃岐に、平家に背いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、此所の洞より、十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段許にもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、舟の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挟み立て、陸へ向つてぞ招きける。

矢面  
てだれ

小兵

さん候



島 屋

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに」と宣へば、射よとにこそ候らめ。但し大將軍の矢面に進んで、けいせいを御覽ぜられん所を、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん」と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば、てだれども多う候なかに、下野國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候」と申す。判官「證據があるか」とさん候。かけ鳥などをあ

らそうて、三つに二つは必ず射落し候」と申しければ判官、さらば與



きりふの矢

一呼べ」とて召されけり。  
 與一その頃は、未だ二十許の男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂にもよぎをどしの鎧著て、あしじろの太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。重籐の弓脇に挟み、兜をば脱いで高紐に掛け、判官の御前に畏まる。判官、いかに與一、あの扇の真中射て、かたきに見物せさせよかし」と宣へば、與一、つかまつるとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきず



扇の的(尾形三月筆)

御説

にて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん」と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義経が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん、さ候はゞはづれんをば存じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ」とて御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まるほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩



扇の的(尾形三月筆)



ませける。身方のつはものども、與一が後を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずると覺え候と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

矢ごろ

(一)壽永四年、(二)八四五年

くしに定まらず

くつばみ

神明

矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許うち入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段許もあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許の事なるに、をりふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れもく、はれならずといふ事なし。與一目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、

よつびいてひようと放つ十二束三ぶせ

えびら(籠)

(一)江戸幕府の儒官名は直清、江戸の人、享保十九年(二)三九四年、(三)七十七年、義経、人録、駿臺雜話等の著がある

この矢はづさせ給ふな」と、心のうちに祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみまれて、海にさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゞいて感じたり。陸には源氏えびらをたゞいてどよめきたり。——平家物語——

二四 仁は心のいのち

室鳩巢

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心



齒徳  
遜讓

死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。それ心は活物なるにより、人に情あり、ものの哀れを知りて、常に活きたるものぞかし、よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事を知り、不義を聞いては必ず恥づる事を知る。若し情なく哀れを知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても恥づる事なかるべし。是をもて言ふに、仁義禮智何れも心の徳にして、各その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁ならば、義も、禮も、智もその様ありその用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の徳にあらず、公の理にあらず。この故に仁に心の徳と言ひて、外に徳を言はず、仁に愛の理と言ひて、外に理を言はず。その言

はざる所に深き意ありと知るべし。

それに就きて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主(一)天徳寺、豪健の勇將なりしが、ある時琵琶法師を招きて、平家を語ら



天徳寺徳小平家平堀を語平堀を聴平堀く筆

せて聴きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師に言ひけるは、某は唯哀れなる事を聴きたくこそあれ。その心得して語り候へ」と言へば、法師「心得候

(一)豊臣時代の武將佐野了伯、二慶長六年、二年四十四、歿

雨、づくくと泣く

とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺哀れがりて、雨しづくくと泣きけり。さて、今一曲前の如く哀れなる事を聴きたし。と言へば、那須の與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣のやからに、過ぎし日



の平家はいかゞ聴きつる。と言ふに、家臣ども、最も面白き事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲共に勇烈なる事にて、哀れなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや、今に不審なる事に何れも申し合ひ候。と言へば、天徳寺驚きて、只今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて、力を落して候。先づ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ池月を高綱に賜はるに、あらずや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察してみられよ。哀れならぬ事かは。とて、しばしば涙を拭ひつゝ、暫しありて言ひけるは、また那須の與一も大勢の中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、馬を海中へ乗入れて、的に向ふに至るまで、源平兩家

武邊

迷惑す

鳴りを靜めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名をれたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察して、みられ候へ。武士の道ほど哀れなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時、も兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各には哀れになりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は唯一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ。と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。

これ天徳寺が武邊は涙より出づれば、固より仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手荒き道なれば、言はゞ仁とは黑白のたがひある様なれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況やその餘の事



は、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらず。これ即ち前に言ひし人に情あり、ものの哀れを知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙こぼす様にだにあらば、これ心徳の全きなり。仁者と言はん、に何の疑かあるべき。

— 駭臺雜話 —

### 二五 文化の使節

衝動

驚くべき文明の進歩は、地球の境域を狭めたかの觀がある。そして極東の孤島である我が國が世界強大國の班に列なつて以來、我等の眼に映ずるヨーロッパやアメリカは、昔の人たちの驚歎した程のものでもなくなつてゐる。けれども、今なほ海の彼方へ行くといふ事は、人々に何か新しい衝動を與へる。海を渡るといふ事が、それ

果敢な氣象

搖籃時代

までに人の心を騒がすのである。かうして絶海の孤島に終始した我等の父祖は、時に果敢な氣象を發揮し、四周の海を利用して、大陸の文明を吸収した。そして開化の波に浴しては、文化の歩みを促進して來た。

遠い昔、上代人の海外發展の壯舉は、先づ三韓との交通によつて始められた。そして漢族の文明は、朝鮮半島を経て我が國に傳來した。茲に大陸風文明の搖籃時代は展開されたのである。聖徳太子は小野妹子を隋に遣された。それは我が國に於ける海外派遣の第一使節であつた。既にこれまで幾度か行はれて來た間接の輸入に慊らないで、新たに大陸の文化に直面しようとした。太子の御意圖は、誠に雄大なものであつた。殊に「日出處天子致書日没處天子無恙」と敢へて對等の禮を執られた。その國書は、苟も自國を萬邦に秀でた中華の國と自負する隋の煬帝をして、いかばかり



淵叢  
將來する

驚愕せしめた事であらう。それだけにまた太子の宏大な御氣宇がしのばれるではないか。  
遣唐使の派遣は、歴史の上に於ける長き日唐關係を語るものである。しかし、その航海の危険は數多の人命を奪つた。榮譽ある國際的使節に任命されながら、生別死別の悲歎を長袖の蔭に祕めて、彼等は海を渡つて行つた。しかしながら、大化の新政、大寶律令、奈良の都や平安朝の文化など、皆國史に輝かしい一期を劃する我が國文化の淵叢は、一にかゝつて彼等の將來した唐朝文明の上にあつた。固より根柢の深い固有文化の誇は棄てなかつたにしても、文化開拓の鍵は彼等が握り、彼等の營々たる辛苦と努力とが、新文化を樹立したのであつた。蓋し島國日本の活路は、唯四周の海を利する以外に途がなかつた。より高き文明との接觸は、自ら出でて自らその氣運を開く以外に途がなかつたのである。

自主的觀念

(一)河海抄に引用  
されてある江  
談に源信僧都  
の語と傳へる。

平安朝の文化には、模倣文化の域を脱して、正に日本文化の獨立を肯定させるものがあつた。國民は漸く自主的觀念を抱いて、自國文化の向上に専念しようとした。その斷えざる文化の向上は、既に當時に於て唐朝文化の恩澤を必要としなかつた。

(二)日本國者、誠雖爲如來之金言、唯以假字、可奉書也云々。

その語は沙門の口より出で、しかも佛教を傳へるのに假名を以てせよといふ思想、自主的觀念の熾烈なこの一語に、當年の日本文化の精彩を窺知する事が出来る。やがて遣唐使は停止されて、日支の國交は永く絶えた。

しかしながら猪水は徒に濁る。刺戟のない文化に發展の途の少いのは寧ろ當然である。新しい自國文化の飛躍は、唯燦爛たる文化に陶醉した王朝人たちの貪る夢に過ぎなかつた。そして政權の移動は文化の向上を阻み、その退歩を餘儀なくさせたのである。



(一)二二〇三年。動因

(二)二二四二年。近國を略した。宗麟と號した。筑後、肥前、四箇國を領した。天正十五年(一五八七)歿。年五十八。  
(三)肥前國(長崎縣)原、日野江兩城の主。慶長十七年(一六四二)歿。年七十二。  
(四)肥前國(長崎縣)大村の城主。大村晴信と祖を同じくする。マニシヨト名をふ。大友義鎮の姪なる日向國都於郡城主。伊東祐青の子。慶長十七年(一六四二)歿。年四十三。

(一)天文十二年ポルトガル人の渡來は、我が國文化更生の遠い動因となつた。切支丹宗の傳來に連れて、新しい泰西文明に遭逢した國民の歡喜は、やがて近世日本の文化を生成す氣運と化した。嘗て日支交通の衝となつた北九州に、再び新たな異國人の足跡が繁くならに隨つて、耳目に馴れぬ異國の新文化に憧憬する念は俄に勃興した。

(二)天正十年、九州の大名大友義鎮、有馬晴信、大村純忠の三人は、遙々特使をヨーロッパに遣し、ローマ法王とスペイン國王とに敬意を表せしめた。その使節は皆紅顔の少年ばかりであつた。正使伊藤祐益及び千々石直員、當年十四五歳の少年使節は、かくして萬里の波濤を蹴つて、遠くローマに使したのである。

固よりこの特使派遣の動機には、宗教的の意圖が働いた事は言ふまでもない。宣教師の慫慂に端を發して、熱烈なキリスト教の信

(三)通稱は清左衛門、キリスト名はミカエルトといふ。有馬晴信の叔父。千石純忠の子。大村純忠の弟に當る。歿年未詳。



(筆師青田前) 節使マ-ロ

者である三大名が、唯一筋に彼等の信仰心を滿さうとして、單にその信仰の標的たるローマ法王に敬虔の微衷を致さうとするものであつたに過ぎない。しかもその渡航たる、航海術の未だ進んでない當時にあつては、帆前船を用ひ、風を待つてその力を利用して行くより外なかつた。重き君命を受けて決死の覺悟を抱くとは言へ、見ぬ世の國へのあこがれがどれ程深いものであるにせよ、故國に孤獨をかこつ母との惜別を彼等はどうして忘れ得よう。しかも果敢な海國少年の意氣は、その愁歎の情を胸底に祕めて、この重大な任務の前に毫も畏縮する所がなかつた。誠に彼等によつて代表



契機

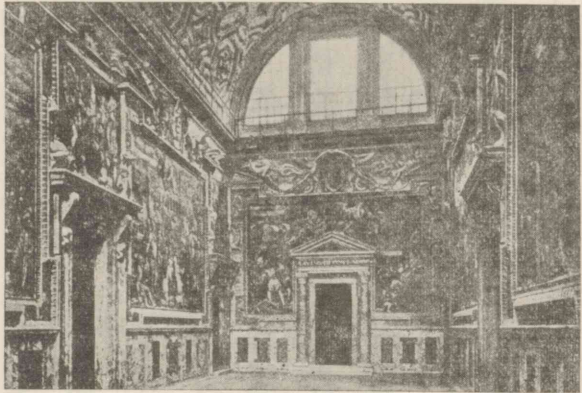
〔Macao.〕我が國  
人は天川と呼  
んだ支那に  
於けるホル  
ガルの領地  
〔Latin.〕  
もとローマを  
中心としたイ  
タリ語の西  
方言、佛伊、西  
葡の四國語の  
本となつた。

された雄偉な氣魄が、やがて近世日本の文化を生成す契機となつたのである。  
彼等は南支那の<sup>(一)</sup>マカオに先づ寄航して、此所に九箇月許滞在した。この間に彼等は<sup>(二)</sup>ラテン語の學習に就いた。遠い異郷への旅の途すがら、その國の國語をかくあわたゞしくも學び知らうとする辛勞。それは將に擔ふべき使命の、彼等にいかに重きに過ぎてゐるかを物語るものであつた。  
一行は印度洋を經、遙かにアフリカの南端喜望峯を通つてポルトガルに到り、陸路スペインに入つて國王に謁見した。更に此所から海に出てイタリーへ行つた。そして法王の膝下たるローマに入府したのは、日本を出てから實に三年一箇月目であつた。行程正に三十二萬二千餘キロメートル。その間の難航、險路は、その費された日子の多いのを以ても知る事が出來よう。

〔中浦ジュリアンと原マルチノ〕

悠揚として迫らぬ

〔The Vatican.〕  
ローマ法王の宮殿、ローマのターバー河畔にある。



「間の王帝」内殿宮ンカチバ

十四五歳の少年使節、今は既に十七八歳の日本武士伊藤祐益、千石直員は、やはり同じ年頃の二人の副使と共に、白地に金糸を以て花鳥の縫をした國服に、眞珠、寶石を鏤めた刀を左に佩き、右手に短刀を持ち、馬上に悠揚として迫らぬ國士的態度を以て、ローマの市民を驚歎隨喜せしめた。そして法王謁見の式は、<sup>(三)</sup>バチカン宮殿内の、帝王の間に於て、感激のうち、に嚴肅に行はれた。法王の前に跪き、恭しく接吻の禮を執る。この日本使節を、法王は身を屈して扶け起し、二度づ、抱擁して、その額に接吻を與へた。そしてその満面には歡喜と愛情との熱涙が流れて、せきもあへぬ有様であつたといふ。法王



のこの絶大な喜悅は、言ふまでもなく、東方布教の成功に限りなき満足を感じたものではあつたらうが、今始めて知る東方異域の年若き信者、その信仰の熾烈なる事と、その材幹の卓越してゐる事とに、また量り知れぬ心強いものを感じたのではなかつたらうか。

彼等は誠にその使命を辱めなかつた。眞に日本の光榮を、その使命の上に輝かしたのである。けれども彼等の使命は、畢竟するに、ローマ法王廳の訪問に過ぎなかつた。しかも彼等が無事歸國した時には、既にキリスト教排撃の空氣が全國を覆うてゐた。歸來間もなく、彼等は相携へて秀吉に謁し、西方の文明を具さに語つて、秀吉の好奇の心を躍らせたが、一度立てた國策を翻させる事は出来なかつた。そして彼等の君侯たる大友、大村の兩侯は既にこの世になく、彼等がヨーロッパに於て見聞經驗した新知識を、自由に我が實社會に應用する途がなかつたばかりでなく、彼等はこの前後八年に互

る長途の旅行中、餘りにも篤信な宗教家、一箇の求道者となつてしまつた。されば彼等は唯一介の宗教的使節として、克くその任務を果したのみであつた。しかしながら、よしその使命が直接我が國の文化に影響を及さなかつたにしても、かくして東西兩洋を結び附けた親交の連鎖が、泰西文明流入の機縁を深めた事は争はれない。文化の使節、彼等は身命を賭して、遙かに海の彼方に日本人の足跡を残して來た。先の遣唐使然り、今また出でて遠くローマに使用した伊藤祐益等然り、彼等は皆直接間接に、我が國文化の發展に貢獻する所が鮮少ではなかつた。

大海の波に揺られて、文化の使節は幾たびか大陸に使し、氣運の流に棹さして、その高貴な文明の東道をした。常に我が國文化發展の轉機に立つた彼等の英姿は、誠に颯爽たるものであつた。

あゝ、文化の使節、彼等は海國日本人の面目を外に輝かすと共に、

東道



内に島國日本帝國の再生と、國民生活の轉換と相承ける偉大な業績を史上に遺したのである。

日本青年館理事、貴族院議員、佐賀縣の人。

### 二六 自由創造の精神

田澤義鋪

我が國民性には、長所の、どこまでも維持擴充すべきものが少くないが、また短所缺點のいかにしても改めなければならぬものもある。長所の隨一は、國家が一大事に遭遇すると、一道の靈光が胸より胸に傳はつて、國民は悉く共通の感激に燃立つ事である。次は、一たび意氣に感ずれば、成敗を論ぜず、利害の打算を超越して、情誼に殉じて悔いない事である。また簡素の趣味を愛し、物質的慾望に比較的淡泊であり得るが如きも、確かに我が國民性の長所の一つであらう。

利害の打算を超越する

一面にかうした長所を有するが、また他面には大なる短所を有

模倣追隨  
附和雷同

する事を忘れてはならない。その最も大なるものとして、私は、自由創造の精神に乏しく、隨つて模倣追隨を事とし、附和雷同に陥り易い一事を擧げたい。歴史をみても、現状をみても、私はかく斷言せざるを得ない事を悲しむ者である。我が文化は曾て印度に學び、支那に倣ひ、或は歐米を模したもので、何としても民族の自由創造の所産ではなかつた。特殊な國體、敬神崇祖の大道、祝詞、和歌、俳諧、上代に於ける氏族制度、鎌倉時代の武家政治、江戸時代の封建制度等には、全く固有なものもあり、また模倣であると言難いものもあるが、大體に於て我が國の文明は、模倣の要素を多く含んでゐると言へる。明治維新の大業は、神武創業の精神に則つたものと言はれる。その氣魄の雄渾にして、志操の壯烈なるものはあつたが、新たな光彩を持つた歐洲文化に接し、加ふるに條約改正の大業を控へてゐたので、先づ泰西諸國の模倣を急務として、自由創造の風を振起す



べき機會と環境とを與へられなかつた。さうして明治時代には、幾多の驚くべき業績があるに拘らず、模倣追隨の國民性の缺陷も、益その大を加ふるに至つたのである。かゝる情勢に對し、成るべく速かに一轉機を劃さなければならぬといふ事は、識者の夙に叫んだ所ではあるが、事實は容易に行はるゝに至らなかつた。かの條約改正が、國民の多大な犠牲によつて成遂げられた時こそは、確かにこれをなすべき最初の好機であつた。しかし、既に日露戦争の危機が孕まれてゐた時であつたので、實現する事は無理であつた。日露戦争の終結後は第二の好機であつたが、この時も遂に空しく機會を逸してしまつた。

世界大戦後數年を経て、歐洲文明の行詰りが批評家の論議に上る事の多くなつた今日こそ、遅れたりと雖も、自由創造の大精神を鼓舞作興すべき機運の彌、動き出した時であると言はねばならぬ。

登極

しかも我が陛下は、登極の初めに「模倣を戒め創造を勗め」と教を垂れさせられてゐる。苟も國民たる者は、正に大いに力を此所に致すべきであらう。

さらば、自由創造の大精神を喚起するには、いかなる方法を取ればよいか。これは眞に重大な問題である。かくの如き國民性に關する大問題は、一二の特別の方法によつて奇效を奏し得べきものではない。政治と言はず、教育と言はず、經濟と言はず、あらゆる方面に於て、不必要な統一や束縛を撤廢し、國民をして附和雷同の陋習を脱せしめ、各その個性に基づいて、自由にその天分を全うせしめ、自己の尊嚴に目覺めさせなければならぬ。さうして自由な研究、獨創の美風を作興するが爲に、一切の方法を講じなければならぬ。それと同時に、個人主義の放縱に墮して、國家社會を念としない様になる事のない様に、細心の注意を要する。即ち、初めに言つた國民的感



激性の長所を大いに發揮し、更に我等の尊ぶべき個人は、社會生活國家生活の基礎の上に立てる個人であり、重んずべき個性は、普遍性の基礎の上に立てる個性である事を明らかに知り、我等の人生は、單なる個體を以て最後の存在とせる個在分立の人生にあらず、始なき始より終なき終まで、永遠に生命を有し、しかも一切を包括せる全一の大人生である事を會得し、我等の個體乃至個性は、實にこの全一の大人生の表現で、その全一の基礎を忘れずにこれを充實發展せしめる事こそ、全一の進展を見る所以であるといふ理解を十分に於て進まねばならぬ。かくして始めて國家社會を熱愛しつゝ、自由創造の大精神を發現する事が出来るであらう。

—道の國日本の完成—

帝國讀本新制第二版卷六終

大正十四年二月十四日	昭和五年八月十八日	昭和六年七月十四日	昭和七年七月十四日	昭和九年十月二十七日	昭和九年十月二十七日
發行	發行	發行	發行	發行	發行
補版	訂版	訂版	訂版	訂版	訂版
正版	正版	正版	正版	正版	正版
新制第一版	新制第一版	新制第一版	新制第一版	新制第一版	新制第一版

帝國讀本新制第二版

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六
四	五	六	七	八	九
拾	壹	貳	參	肆	伍
錢	錢	錢	錢	錢	錢



芳賀矢一	編者	上田福平	訂補者	長谷川萬年	同	東京市神田區神保町一丁目三番地	發行所	代表者	印刷所
同	東京市神田區神保町一丁目三番地	同	東京市神田區神保町一丁目三番地	同	東京市神田區神保町一丁目三番地	同	東京市神田區神保町一丁目三番地	同	東京市神田區神保町一丁目三番地

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地  
合資社 富山房

電話神田二、一七一—二、一七八番  
振替口座東京五〇一八番



修道中學校

三ノ三

No. 24

小林

乙二

14

40

30

21

~~45~~

3

30

9

1

20



修道中學校

三ノ三

小林乙二